

---

# 天空の恋愛～晴れ時々曇～

美空 柚姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天空の恋愛～晴れ時々曇～

### 【NZコード】

N6876Y

### 【作者名】

美空 柚姫

### 【あらすじ】

天使学園の最終科目「人間学」の実技。人間界の偵察を命じられる。

主人公と親友は高校に通う事になる。そこで、意外な人物に遭遇する。

人間と仲良くなるにつれて、喧嘩・恋い・遊びを覚えていく…しかし、天空の掟を破ってしまう…

天空に戻り、聖なる魔法を使う天使として修行をしながら結婚し、出産をしながら、魔界人との戦いを行つて行く。

## 人間界に行く前の少しの幸せ

「分かりました。行つて参ります」

私は天使の見習いのアムエル。

天空学園に通う見習い天使。

天使事務局からの人間の偵察を命じられた。

人間の姿をし、高校に通う事になった。

親友のミルエルと共に、従姉妹で家庭の事情で転入という設定にさせられた。

事務局から人間名が通達され

ミルエルは伊藤美紀。

私は、恐る恐る紙を見ると菅野愛子。

二人して平凡な名前ね…と話をしていた。

学園の花畠に行き、二人で話をしていると

私のフィアンセのシンセ様とミルエルの想い人のダグ様が現れた。  
シンセ様は

「アムエル？偵察が終わつたら、学園も卒業になるのだな？」

私は笑顔で

「偵察終わつたら無事に卒業です」と話す。

シンセ様は花を見ながら

「昔は猫だったのに、人間だなんて…」

私は首を傾げ

「シンセ様？人間だと何かあるのですか？」

シンセ様は私の頭を撫でて

「いや、人間界を楽しんできなさい。少しのお別れだな」

私はシンセ様の笑顔だけが嬉しかった。

ミルエルを見ると、ダグ様と楽しく話していた。

「シンセ様？ダグ様はミルエルをどう想つていらっしゃるのですか？」

シンセ様は笑いながら

「それは、ダグエルを見れば分かるよ。あんなに楽しく話すダグエルはそんなに見ない。と言つことはどうゆう事か分かるか？」

私はよく分からず。首を傾げてしまつた。

シンセ様は笑つていた。

出発する時間になり、私とミルエルはしばらくの別れをして、人間界に降りた。

## 人間界に行く前の少しの幸せ（後書き）

自分でも、まだまだどう進めて行くか考えていますが  
恋愛ファンタジー系なのかな…と思っています。

## 人間界に降り、初登校（前書き）

第2話は、

人間界に主人公のアムエルと親友のミルエルが高校に初登校する回です。

ミルエルは人間界に怯えていますが

アムエルは弱気を隠し強気で登校します。

宜しければ、読んでください。

## 人間界に降り、初登校

ミルエルとは一人で同じ家。

初めて、人間界でお弁当を作る。

ミルエル

「これ、ダグ様に食べてほしいわ…」

私も

「シンセ様に食べてほしいわ…」

家の中では、楽しい！

しかし、登校の時間になるとお互い緊張心が体を駆け巡る…  
二人で初めての人間界に緊張…

学校の制服に着替え、学校に向かう。

ミルエルは私の腕を掴んで

「アムエル？ 緊張しない？」

私は驚いて

「ミルエル？ 人間界でその名前は駄目だよ」

ミルエルは私を見て

「あ、そつか… 愛子？ スカート短くない？ 天使の正装は足の隠れる長さだから、なんだか落ち着かないわ…」

「そ… そうね。でも、今の高校生は短いのが流行りらしいわよ」

一人で学校の校門に立ち

「今日から通う学校ね…」

皆が私達をじろじろ見ている。

私は勇気を出して

「美紀？ 行くわよ」と先に歩きだした。

美紀は

「職員室に来なさいって言われたわよね

私は高校生を見て

「あ、私たち…高校生みたいな喋り方じゃないとまずいわね…全然、出来ないわ…」

美紀は心配している。

私がどうにかしよう…

「私が言つから、何とかしましょう」

恐る恐る職員室に入る。

「失礼します。三年A組の担任の先生はいらっしゃいますでしょうか？」

先生は石田先生。

「君達が転校生だね？伊藤さんと菅野さん。三年の一学期からなんて珍しいな。一人は従姉妹だね？」

「はい。宜しくお願ひします」

先生は紙を見ながら

「良い所の女子校から来たのか…じゃ、教室は三階だから自分達で行つて？席には名前書いておいたから」

私は恐る恐る周りを見ながら挨拶をして

職員室を出て一人で深い溜め息をついた。

階段を上がりながら美紀の耳元で

「堂々としておかないと、虜められるわよ。偵察だからね…」と小声で喋る。

三階に着き。

「A組ね。此処か…」

ゆっくり入ると、クラスの皆が私達をじろじろ見てくる。

頭を下げながら、席を探す。

すると、女の子に話しかけられた。

「転校生？私、学級員の氷川佳代子。宜しく」

「宜しくお願ひします」と笑顔で返事をした。

美紀の背中を叩いて合図すると

「宜しく」と頭を下げていた。

氷川さんは、席に案内してくれた。

窓側の一番後ろに私。その前が美紀。

氷川さんは手を合わせながら

「隣の席は…ちょっと暴れん坊だけど。空いている席が此処しか無いの。ごめんね」と戻つていった。

他の生徒は皆、こちらを見て笑つている。

美紀はこちらを向き

「暴れん坊つて何よ？怖い人？面倒な事になつたら嫌だよ…」

私は美紀の肩を叩きながら

「どんな奴が来たつて、気にしないで対応すれば良いじゃない？此処からは空が見えるわ。ダグ様もシンセ様も見ていて下さると思えば良いじゃない？」と笑う。

美紀は私に

「愛子つて、そんなに度胸あつた？」

私は顔を横に振りながら

「いや？人間に負けたくないだけだわ。それに、この偵察学が終われば帰れるのだからさ？」と笑う。

美紀は呆れている。

## 学校生活（前書き）

一人の席の横に座った、少年達とはどうなつていいくのだろう…

外を眺めていると、隣の席に誰かが座った。

振り返ると、長髪の綺麗な顔をした人。目付きが怖い。

美紀の隣の席は、金髪のやる気の無さそうな人だつた。

「なんでそこに座っている?」と、ガムを噛みながら話しかけられた。

「私の席だから」と笑顔で言い返した。

周りの生徒は何故かこちらを見ないようにしている。

「隣に誰かいると邪魔だ」と横目で笑う。

私も微笑みながら

「居ないと思えば良いじゃないかしら?」と言い返す。

隣の席の人は、私に向かって

「度胸がある女だな」と田が呟つ。

私は田を見て

「話す前に自分の名前を言うのが筋じゃないかしら?私、菅野愛子。

美紀の隣の席の金髪の人が

「俺、前川達也」と握手をしてきた。

私は笑顔で「達也君、宜しく!」つちは美紀。仲良くしてね

美紀と握手をしている。

達也君は私の隣の人の名前を教えてくれた。

「こいつの名前は石橋透。怒らせると怖いから気を付けな」と笑っている。

透君はやる気無さそうにこちらを見て

「所詮、良い所のお嬢さんだろ?金持ちそうだな」と嫌みを呟つ。

私は負けたくないと思い

「あら、そう見える?私達、親が居ないの。だから一人で生活していて。お嬢様なんかじゃないわよ」と笑顔で返す。

透くんは首を傾げて

「何時からいない？」

美紀が初めて話した。

「小さい時には…もう居なかつたわよね」と私を見て笑う。私は「親ね…」と空を眺める。

その時に金髪の女の子の集団が入ってきた。

その子達は私達を見て

「ちょっと、あんた達！何でそこに座つているの？！」

美紀は驚いて前を向いている。

私は溜め息をつきながら

「嫌でもここが私の席だから？」

女の子達は

「透君と達也君に手を出したら、絶対許さないから一覚えておく事ね」と笑いながら教室を出ていった。

私は笑いながら、達也君と透君に

「二人は人気ですね。面白い学校生活になりそうだわ」と笑う。美紀が達也君に「今の彼女なの？」と聞いている。

透君は呆れながら

「彼女じゃない。付きまとわれて迷惑している」

その時、担任の先生が入ってきた。

「朝の出席。名前呼ぶぞ」と、言つと皆が席に座つた。

名前を呼ばれ返事をする。

先生は「もう知つているだろ？が、後ろの席の菅野と伊藤は転校生だ。仲良くしてやつてくれ」と出でいた。

美紀が振り返り

「勉強つて何するの？」と聞いてきた。

それを聞いていた達也君が笑つている。

「勉強つて何するのとか…やる氣ない発言」と笑つている。

私は美紀に「楽しくなりそうね」と話すと美紀の顔が曇つている。

一限目は数学。

プリントを渡され、回答を書き始める。

美紀が紙を渡してきた。

「一」の問題。相当、昔に人間学でやつたよね?」

私はその紙に返事を書いて渡す

「天空と人間界の時間の流れは違うのよ。とりあえず、書いて出せば良いのでしょうか?」

横目で透君を見ると、すらすら回答を書いている。

意外に頭が良いのか…暴れ者なのに?と微笑んでしまった。

人間学の勉強は面白い。

学園と比べたら、楽しくて美紀も喜んでいた。  
すぐには昼休みになってしまった。

美紀が「お弁当食べよう」と喜んでいる。

人間界で初めて作ったお弁当だから、美紀は嬉しいらしい  
「何処で食べようか?」と楽しそうに話をしてきた  
「空が見える所が良いね」と話になり、屋上に上がり辺りを見ると  
そこには、人間界で言う不良が沢山いた…

美紀は私の腕を掴んで

「怖い人が沢山いるから、教室で食べよう」と戻ろうとする

私は笑いながら

「気にしないで食べようわよ?」

美紀は溜め息をつきながら

「アムエルは、堂々としているわね…私は怖いわ」

私は美紀の頭を撫でながら

「だつて、弱氣で居たら負けるでしょ?」

美紀は私を横目で見て

「本当は弱気なのに…」と言いつ。

「二人で弱気じゃ駄目でしょ?変わってくれる?」

笑うと顔を横に振っている。

すると、知らない男子達が話しかけてきた。

「知らない顔だけど、一年生？」

私は「転校で三年だよ」と話しかける

「俺ら、一年だ。宜しく！名前は？」

「私は愛子。こっちは美紀だよ」と笑うと

「そつか、俺…秀人、宜しく」と去つて行つた。

周りを見ると、煙草を吸つている子達が多い。

「美紀？屋上は偵察の場所ね」と笑う

美紀は溜め息をつきながら

「私達、学校終わつたらバイトだよね？」

私たち天使が経営している手作りのアクセサリー屋があり、今日から偵察の間は働く事になつていて

それも、学園の学習の一部。

一人で空を見ていると

美紀は「ダグ様に逢いたい…」と呟く。

私も空の雲の流れを見ながら

「シンセ様はどうして私をファイアンセに？」

美紀は呆れて

「学園の花畠に良く座つてゐるでしょ？元々、シンセ様の定位置だつたのよ？場所を取られて、好きになつたとか？」

私は笑いながら

「そんな事で、ファイアンセにしないわ。あ、今日こそ教えてよ？私の羽の色の事！」

そう。普通の天使は色が白い羽、私の羽の色は眞と違つてピンク色に少し染まつていて。

美紀は溜め息をつきながら

「学園長が言つていたでしょ？道を間違えるなつて。それしかわらないよ。私から言わせれば、眞つ白より色が少し染まつている方が羨ましいのだからね」と肩を叩かれた。

美紀は考えながら

「それに、シンセ様が待つていてくださるだけ羨ましいわ…私なんか、待たれてないのだから…偵察学の間にダグエル様にお相手が出来るのはじやないかと不安になるわ」

私と美紀は笑つた。

教室に戻ると、女の子達が心配そうに集まってきた。

「あの一人の横の席…大丈夫？」と不安そうにしている。

私達は笑顔で

「問題ないので、安心して下さい」と笑うと皆が散つていった。

## 学校生活（後書き）

アムエル（愛子）が小心者のと書いたわざこな強気すがれるよつな気  
がします…

## 高校生活（前書き）

隣の席の透と達也と少しずつ仲良くなっていく。

透のアクセサリーを横目で見て、天使の作り物だと口走ってしまうため

二人は愛子と美紀に目を付け始める

午後はオリエンテーション。

紙が配られ美紀と見ると修学旅行と書いてあった。

美紀は振り返り

「修学旅行つて…泊まり？！報告口と被らないと良いにけど…」

内容を見ると沖縄と書いてある。

美紀が耳元で

「沖縄つて何処？」

私も分からず

「帰つて、地図見よう」と話をした。

先生が生徒に話し出した。

「観光は班で行つてもらうからな。地元の電車とバスを使いなさい。班で別行動は違反になる。菅野と伊藤は前川と石橋と一緒にだ。気を付けて行動しなさい。特に他校の生徒と喧嘩をしないようこーー！」

美紀が「アム…愛子？ 一週間後だわ」

私は何気なく

「今日、店長に言わないとね」と話をしていた。

透君が「店長？ バイト？」

私は紙を見ながら

「そうなの。私達、渋谷のムーンビームスつていう手作りのアクセサリー屋で働くの

「この店か？」とリングを見せてきた。

それは人間には見えない、天使のお守りの輝きを魅せている。

私は横目で見て

「そうそう。それお守りでしょ？ 絶対、無くしたら駄目だよ？ ワイマーが切れたら、お店に持ってきて？ 直すからね」

達也君がおもむろに

「そこの店、凄く繁盛しているよ。店員なんか募集していないはずだけど？」

美紀と目を合せ、まことに思いながら

「店長が知り合いで…こっちに引っ越して来たらバイトの約束をしていたの。引っ越す前に他の店舗で働いていたからね」と適当に嘘をついた。

横目で透君を見るに、リングを眺めて、考え方をしている様子だった。透君が「オリジナルの作ってくれる?」と話をしてきた。私は笑顔で頷いた。

透君に「修学旅行宜しく」と言いつと

迷惑そうに「二人が来たから、自由行動出来なくなつた」と嘆く。美紀が達也君に聞いている

「私達が居なかつたら、どんな行動を?」

二人は目を合わせて

「観光しないで、空を眺めるだけ」と笑つている。

私達も「それ良いわ！空眺めたいな」と笑う。

下校の時間になり、美紀と二人で校舎を出ようとしたら  
お昼休みに逢つた秀人君が待つていた。

「おー一人さん？一緒に帰りませんか？」と笑つている。

私は笑いながら

「秀人君ごめんね。これから私達バイトなの」と笑顔で手を合わせて謝る。

秀人君は笑いながら

「バイトなら諦めるよ。まだ時間はあるからね」と帰つて行つた。

周りの女の子が私達を見て文句を言つている…

「あの二人、初日から田立ち過ぎじゃない？」

そんな声が聞こえてくる。

美紀に「気にしないで行こう」と腕を組んで歩く。

校門の所に透君と達也君がいた。

達也君が「これからバイト?」

私達は笑顔で頷く。

私たちはどちらから来たのか、忘れてしまい…

「あ、駅つてどっちだっけ…?」と聞くと

透君が「駅まで前歩くから、ついてきな」と歩き出した。

私達は顔を合わせ、着いていく。

駅に着き、一人にお礼を言つて切符売り場の前で止まつてしまつた。

美紀が「切符どうやつて買うの?」

私は紙を見て「渋谷でしょ…? 買い方は…」と説明書を見て買う。

達也達は私達を見て笑つてゐる。

達也

「切符買つのも初めてみたいに見えるな。ムーンビームスか…あそこで働くのは決まつた奴だけだ」

透「横目で見ただけで、お守りつて分かつた。俺らの正体がばれるか、向こうがばれるか…勝負だな」

渋谷に着き、一人で色んなお店を見ながら歩いていた。

美紀は「人間界つて、お店が多過ぎ」と騒いでいる。

私は思わず

「渋谷つて人波が凄いって書いてあつたけど、こんなに凄いとは思わなかつたわ…」

他の学校の男子生徒や男の人声を掛けてくるけど、笑いながら無視をする。

一人で迷子になつてしまい

「お店はどの辺かな?」

地図を見ながら探す。

お店を見つけ、入口に入ると川が流れている。

足元が透明で貝殻や宝石が置いてあり、青く光っている。

「綺麗だわ…」

お店はお客様で混雑している。

「本当に人気なのだね…」と話をしながら、商品を見ていた。

店長さんは男の方で、他の店員さんは女の方だった。

レジの奥に男性が見えたので

「すいません。今日から働かせて頂く者ですが…」と言いつと、奥に通された。

男性は

「僕の事は健一と呼んでくれ。アムエル君とミルエル君だね。事務局からは聞いている。人間の名前を聞き忘れたのだけど…」

私は「菅野愛子です」

美紀は「伊藤美紀です」と一人で頭を下げた。

健一さんは

「菅野さんと伊藤さんだね。お店の接客は慣れている子がしないとまずいから、アクセサリーの作り方は教えてもらつたね？隣の工房で作ってくれる？」と隣の工房に連れて行ってくれた。  
そこは、工房といつても外から丸見えだ…

シールは貼つてあるけどバレバレ。

工房には学園で一緒だった子達が居た。

健一さんは「とりあえず、自分の好みで作ってくれるかい？学園で習つた様に気を込めて。あと、工房の中だけ天使の名で呼び合つても良いけど、万が一の為に気を付けて？」

私は修学旅行を思い出して

「健一さん、来週学校の修学旅行があるので、行つた方が偵察になりますかね？」

健一さんは考えていた。

「うーん…、バレない様に出来るか？」

私は恐る恐る頷いた。

「なら、行つて良いよ。あ、これ。天空の人からの差し入れ」と笑いながらお店に戻つて行つた。

私と美紀に渡された。

私は美紀に「天空の人から差し入れ?」と見てみるとピンクの石と白い石のリングだ:

メッセージカードが入つていて。

「アムエルへ 偵察学が終わつたら、一番に私の元に帰つて来なさい。シンセ」

美紀が覗き込み

「シンセ様からの送り物じやない! 羨ましいわ...」とメッセージカードを閉じると自然に消えていった。

私は心中でシンセ様に笑顔を送つた。

美紀はゆっくりと袋を開けると、紫と白の石の腕輪だつた。

私は嬉しくて「色違いじやない? あ、メッセージカードは?」

美紀は「入つていいよ... 誰からだろ?」

二人で恐る恐る見る。

「ミルエル 偵察学頑張りなさい。帰つて来たら遊びにくるのを待つていてよ ダグエル」と口に出して読むと、自然に消えていった。

美紀は凄く笑顔になつて、私に抱きついてきた。

「私、幸せ! 偵察学頑張る!」と張り切つている。

工房の他の天使も笑つていて。

健一さんが笑いながら入つてきて

「そんなんに嬉しいのか? シンセ様とダグエル様が前に買いにきて、天空で作つたのかな?」と腕にリングを付けてくれた。

私達は驚いて「手作りですか?!

健一さんは頷きながらお店に戻つた。

二人で浮かれながら「仕事しないとね」と向かいの席に座り、一つずつ並べて色合いを合わせて組み上げてい

く。

「一いつつ氣を込めないと駄目ね？人間が見ているから、光を出す訳にはいかないわね…偵察学より難しいわ」と口々に話す。

達也と透は、何氣なくお店を眺めている。

居ないと外に出て、工房を見て私達を見つけた。

達也が「あ、居たぜ？本当にバイトだ。しかも作っている。凄いな」と笑う。

透は「気に入った」と言う。

達也は「どっちを？」と聞いたが、透は答えないで笑っていた。

そんな事も知らず、真剣に作っていた。

美紀が「沖縄って何処だろ？…」

私は「初めての事だらけで怖い様な、楽しい様な…変な気分だわ」

美紀は心配そうに

「アムエルは学園では小心者なのに、学校では堂々としていたわね」私は溜め息をつきながら

「だつて…強氣でいないと、喧嘩売られたらどうするの？それを言うなら、ミルエルは学園だと強気なのに小心者みたいじゃない！」

美紀は「人間があんなに居たら怖いじゃない…」

「ま、卒業まで頑張りましょう…」と一人で溜め息をついた。

健一さんが仕上がりを見に来た。

「どんな感じ？」

私と美紀は出来た物を並べて見せる。

「二人の雰囲気が全く違うけど、愛子ちゃんの物は可愛い。美紀ちゃんの物はカッコ良い。一人の作るものは対照的だけど、売れそうだ。良いね」

私達は笑顔になつて、作り続けた。

お店が閉まり、工房もシャッターで真つ暗になつた。

健一さんが

「天使の姿に戻つて休憩しなさい」と言つので天使の姿に戻つた。

皆、疲れていた。

同学年の工房の子達と話をしていると  
小学校、中学校、高校、大学、会社に出ているらしい。  
お店の店員さんも来て、天使の姿になる。

「ようこそ。ムーンビームスへ。偵察学も大変だけど、ここで修行  
するのも力を使うから大変よ。工房も人間から覗かれるから、気を  
抜いちやだめ。気を抜いて良いのはお店が閉まってからね？天空と  
人間界は時間の流れが違うから、それも気をつける事。家に帰つた  
ら偵察学のレポートを一日ずつ書くこと。人間との関わりも必要だ  
けど、気を抜いたら駄目。事務局からの連絡事項は偵察学の経過報  
告は一週間に一度。人間界の14日分をまとめて事務局に出しに行  
くように」と言い。

その人は笑顔でお店を出て行つた。

## 夜空の綺麗な場所へ

人間の姿に戻り、家に向かう最中にアイスクリーム屋を見つけた。美紀が「食べたい！」と言つので、買って食べながら歩く。何か視線を感じる…

美紀に食べながら

「視線感じるわよね…どこかしら？」

美紀も、うすうす気づいていた様子で

「周りを見ちゃダメよね…気にならないで歩かないと」と

すると、美紀が後ろから誰かに抱きつかれた。

振り向くと達也君だつた。

それに透君もいた。

私は驚いて「何で居るの？」と笑うと

達也君が笑いながら

「学校帰りに遊んでいた。お店、見に行つたよ！工房に居るんだね！作れるなんて羨ましいよ！」

透君に「アイス食べます？」と聞くと、無言で食べ始めた。

達也君が「夜空の綺麗な場所知つてているから、見に行かないか？」と聞いてきた。

私は笑いながら

「転校生を誘うなんて、凄いですね」

透君は「何処に住んでいるの？」と

「私達は二子玉川です」

達也君が「同じだ」と言つた。

透君は「俺ら、一人で暮らしている。夜空の綺麗な場所も二子玉川にあるから、丁度良い」

達也君は浮かれていた。

私と美紀は戸惑いながら、着いて行く事に。

着いたのは多摩川の土手だつた。

達也君は「此処からの眺めは綺麗だよ」と寝ながら眺めている。私達も無言で夜空を眺めている。

私は寝ながら眺めている透君の顔を覗き込んで「なぜ、夜空が好きなのですか?」と聞くと夜空を見ながら「懐かしいから」と答えた。

「懐かしい…ですか?」

時間を忘れて、無言で眺めていた。

「そろそろ、帰らないと」と言い、私と美紀は帰る事に。美紀に帰りながら

「これから、レポート書かないとな。人間も夜空が好きなのか」と笑いながら話して帰つた。

レポートを書き終えて、美紀はシャワーを浴びている。

私は屋上に天使の姿になり夜空を眺めて居た。

すると「そこは、俺の居場所だけど?」と聞こえ振り返り「すいません。夜空が綺麗だつたので…」

真つ暗で誰だか分からぬ。

「あ、では…私は失礼しますね」と言つと手を掴まれキスをされた。驚いて「誰ですか?」と言つと口に指を当て抑えられた。誰だか知らない人は「おやすみ」と言い何処かに消えた。

私も部屋に戻り…

驚きで胸が張り裂けそう…

当然、美紀にも言えないわ。

学校の日々も慣れてきて、修学旅行の日になつた。透君の言う通りに観光はなるべくしないで空を眺めて四人で話をしていた。

でも、修学旅行で班の発表をするよね…と話になり。少しは観光するかと、水族館に行つたりガラス細工のお店に行つたり、珍しいご飯を食べたり。

四人で写真も撮つた。

無事に修学旅行も終わり：

クラスは進学モードに入つていた。

美紀と自分達には関係ないねと話をしていた。

## 天空へ経過報告・二学期も終わりころ

経過報告にミルエルと天空に戻った。

ミルエルはダグ様の所に逢いに行つてしまつた。

私はゆつくりシンセ様の家に向かつた。

家の前に着き

心中で「シンセ様、帰つてきました」と言つと  
二階のベランダから声がした。

シンセ様が「おかえり」と笑つていた。

私も笑顔になつた。

こつちにおいてと、家に入りシンセ様に抱きつく。  
シンセ様は笑いながら「本当に事務局に行つて、すぐ来たのだな」と頭を撫でてくれた。

「でも、もう戻らないと困ません」と寂しくなる。

シンセ様は

「大丈夫だ。いつも見守つてはいる。ダグエルみたいに嫉妬はしない」と笑つている。

私も笑いながら少し話をして、人間界に戻つた。

一ヶ月…一ヶ月…

すつかり達也君と透君とは話すようになつていた。

お昼も4人に上がり、屋上で食べていた。

透君は無口な方で達也君が喋つてくれる。

二人は幼馴染らしい…

バイトが終わつて、土手で夜空を眺める…

待ち合わせもしていないのに、一人によく逢う。

私は透君に

「星は産まれたり、消えたりしているでしょ？」

透君は無言で頷く。

私は続けて

「嬉しいのか悲しいのか分からないわ…」

透君は私を見つめて目を合わせ、頬をつつかれた。

私は笑い、透君の頬をつんづん指で触つて楽しんでいた。

美紀が

「透君と達也君は進学するの？」

達也君は

「同じ大学に行くつもりだよ。一人は？」

私は川をに石を投げながら

「引っ越し前の所に戻るかな…」

美紀「そうなるね…」

私は悲しくなつて

「仲良くなつたのに、もう一学期終わっちゃう…」

そんな日のお昼休みに、女子軍団に呼ばれた。

日頃、クラスに文句を言いに来ていたけど

透君と達也君が追い返していくくれた。

透君は呆れながら

「どうせ、俺達の事だから行かなくて良いよ

私は笑いながら

「大丈夫。美紀行こう？」

よく天使学園で聞いていた、学校の裏つて所に連れてかれた。

「あの一人と仲良く話しているみたいね？転校生だから甘く見ていたけど。調子に乗ると許さないわ」

私は負たくない一心で

「あの一人が好きなら、離れなければ良いじゃないの？私達はある席に指示されて座っているだけ。それに話しかけてきたのは向こうよ？」

金髪の女の子は

「なら痛い目に合わせないと分からないのね」と去つて行つた。

美紀は私の腕を掴んで震えていた。

「人間の怨念つて怖いわ…」

美紀と歩き、教室に戻りながら

「負けたら駄目よ。人間界で無事に卒業しないと…私から離れたら駄目だからね」と言い聞かす。

教室に戻ると、クラスの皆が私達を見ていた。

氷川さんが来て

「あの二人と仲良くしていると良い事ないからね」と言い戻つた。

私達は席に戻り、美紀は机にもたれていた。

私は笑いが収まなくて笑つていた。

「今日は何も無いから暇だね」と話していると

秀人君達が私達の前に現れた。

「今日はお二人にお話があるんですけど?」

いつもの笑顔では無かつた。

路地裏に連れていかれ

「先輩から、前川先輩と石橋先輩から引き剥がせつて言われたんですよ。先輩にこんな事をしたくないんですけど」と顔を殴られた。

私の唇は切れて血が流れている。

美紀は後ろで震えていた。

秀人君は私の頬を触り

「惚れている先輩に手を出したく無かつたんですが、言われた様にしないと僕等も困るので…」

私は秀人君の目を見て

「それで?その言葉を鵜呑みにして、あの二人と仲良くするのをやめると思う?」と笑う。

秀人君は「なら奪うしかない」と言い、キスをしようとした。

すると他の学校の生徒なのか…

秀人君を蹴り飛ばし

「今度、同じ事をしたら許さん…」と言つと、秀人君達は消えて行つた。

私と美紀は何度も頭を下げ

「すいません。助けて頂いて有難うござります」

その人は私の頭を撫で「気にしないで」と言い

私のリングを触つて、笑顔で見ていた。

もう一人の人は美紀の頭を撫でて、二人は街に消えて行つた。

美紀は私を見て

「口から血出でいるよ? 大丈夫?」

私は笑いながら

「人間の姿だからさ? 痛くないよ?」

血を拭くと痣になつっていた…

その場に座り一人で話をしていた

「助けてくれた二人は… 誰だろ?」

二人で「あの制服、見たことが無いわ…」

美紀が「私なんか、頭撫でられたよ?」

私は「リング見て笑つていたよ?」

二人で笑顔が誰かに似てゐるよね… と話をしていた。

私達二人は

「まさか、シンセ様とダグ様…? でも笑顔がそつくりだわ… 人間界にはいないわよ」

溜め息をついた。

## 天空へ経過報告・二学期も終わりとなり（後書き）

一ヶ月、二ヶ月… とこうとうじるにもうとネタを入れれば良かつたか  
などおもいます

## 天空の掟を破つてしまつた

街を歩きながら、美紀と携帯電話を買ってみようと話になり、選んで契約をした。

この世界では、保護者はお店の店長さんになつていてる。

その後は、お茶をしたりショッピングをしていた。

美紀は買つた袋を下げる

「天空で人間界の洋服を着てダグエル様に見せたいわ」と楽しんでいる。

土手で携帯電話を操作しながら

「使い方が分からない」と悩んでいた。

私と美紀は説明書を見ながらお互いに話をしていた。

私は笑いながら

「なるほど人間界つて色んな物があるね…携帯電話もレポートに書けるね」

後ろから声が聞こえ、達也君と透君が来た。

達也君が驚きながら

「口…どうしたの?」と聞いてきた。

私は苦笑いをしながら

「慌てていたら、転んじゃつたの」と言つと

美紀が私の腕を掴んで、顔を横に振つていた。

透君が心配した顔をして

「もしかして…俺等に関係あるのか?」と聞いてきた。

私は笑顔で

「女同士の喧嘩だよ」

透君は

「女の力で唇に痣が出来るのか?」と唇を触つてきた。

「馬鹿力?」と首を傾げて笑つた。

私の目を見て「あの女達か?」と聞いてくる。

美紀が

「女じゃなくて、男だつたよ」

二人は驚いていた。

「でも、助けてくれた人が居て…とりあえず一発殴らせるのが筋でしょ?」と笑うと

透君は呆れて「馬鹿すぎる」と頭を叩かれた。

達也君が「同じ学校の奴か?」と。

私は「一人に心配をかけさせたくなかった。

「ま、この話題は終わりで携帯の操作を教えて?」と優しく言つと

達也君は「言わないと教えない」と笑う。

私と美紀は意地になり、一生懸命操作をする…

達也君が美紀に聞いている…

私は美紀に「美紀?喋つたら許さないからね…」と横目に見る。

二人は「頑固な愛子」と笑つてゐる。

「自分達の事は、自分達で解決するよ」と笑いながら透君を見た。

透君は笑つていて、私も笑顔になつた。

「そう言えれば、二人共どこに住んでいるの?」と聞くと

達也君が、すぐ後ろのマンションを指でさしてゐた。

私と美紀は「え?同じマンションだよ?…」と驚いた。

美紀が「私達6階だよ」と言つと

達也君「俺等も6階!」と驚いていた。

四人で「偶然すぎる…」と笑つてゐた。

すると、後ろから秀人君が一人で來た。

私と美紀は驚いて

「何か用事?」と聞くと、私に話があると言つ。

私は立ち上がり秀人君に着いて行こうとするが、美紀が手を掴んで顔を振つてゐる…

「美紀？大丈夫だから、安心して？」と、着いて行った。

二人になり

「今度はどんな話？まだ、殴り足りないの？」

秀人君は私に頭を下してきた。

私は驚いて

「頭下げてどうしたの？」と驚く。

秀人君は

「好きな先輩を殴つてしまつて…すいません」

私は笑いながら

「名前は分からぬけど、透君と達也君を気に入っている人から頼まれたのでしょ？気にしていないから安心して」

秀人君は心底謝つてくれているのが分かる。

「許してくれるのですか？あの二人には話してないのですか？」

私は笑つて

「あの二人に話したら、秀人君が痛い目に合つでしょ？それは、私は望まないから、言つてないよ？」と答える。

顔を上げられなさそうに

「先輩は強いのですね…」と

私は困り…

「秀人君？とりあえず顔を上げよう…目を見て話をしないとさ？」

秀人君は頭を上げてくれた。

私は秀人君の目を見て

「卒業まで、仲良くして？好きになる気持ちは大事にしないと！だから彼女達の気持ちも分かるし、こうやつて秀人君が謝つてくれるのも勇気がいる事だと思うよ？でも、自分達で言わないで人を使うのはいけない事。言いたい事があるなら、本人に直接言わないとね…秀人君？女の子に手を挙げるのは、もうやめた方が良いよ」

笑顔で手を差し出し握手をした。

秀人君は私の痣を触り、頬にキスをされた。

私は、急な事で驚き…

人間の男の人にキスされた…

秀人君は後ろを見て、頭を下げて帰つて行つた。

おもむろに後ろを見ると、透君が居た。

私は「盗み聞きは良くないよ！」と笑うと

「あいつか？」と追いかけようとした。

私は透君の腕を掴むと、私の目を真剣に見つめてきた。

「もう、終わつた事だから大丈夫なの…安心して？」

秀人君は私の頬を触り

「なぜとめる？俺達の事で痛い思いしたのだぞ？」

私は人間の姿で殴られたから痛くなかったし…

「私が殴られたのだから、透君には関係ないでしょ？」と笑顔で首を傾げる…

透君が急に私を抱きしめた

私は胸がドキドキしてしまい

「透君？ドキドキするからやめて？」と言つと

透君が笑つている。

「笑う事じゃないでしょ？」と笑つてしまつた。やつと離してくれて…

人間の男の人…困るわ。でも、胸がドキドキする。シンセ様の時は安心するのに…

透君は

「愛子の唇に痣は許せないけど、そのお返しだ」と  
私の唇にキスをした。

私は驚いて離れようとしたが、男の人の力は強い…

透君は唇を話してくれた…

「嫌なのか？」

私はどう答えたら良いのかわからず…

「嫌とかじやなく、人の目があるし…」と首を傾げる。

透君は笑つた。

「いちを、女心はあるのだな」と戻つていった。

私は天空の掟を破つてしまつた。

…どうしよう。

## 知つてしまつた眞実

…どうしよう。

まさか美紀に話す訳にもいかない…  
まさか一人に見られた?と思いつ

美紀の方角を見ると丁度隠れていた。  
溜め息しかでない…

とりあえず戻る?…

私は笑顔で三人の元に戻った。

美紀が「何の話だったの?」と聞いてきた。  
笑顔で「謝りに来たから、少し話したよ?」

達也君が「あいつか?」

透君に聞いている。

私は頭が回転せず…

「もう、解決したから。終わり!」と話を終わらせた。

美紀が

「でも、助けてくれた人誰だろ?…見たことの無い制服だったね」  
「気になるのか?」と達也君が聞いてきた。

美紀は言いづらそうにしているので、私は達也君に

「お礼をちゃんと言つてないから」  
すると「律儀すぎる」と言われた。

美紀が突然一人に

「お酒つて…美味しいのかな?」と聞き始めた。

透君も達也君も「毎日飲むけど…?」

「味わつてみたい!」と美紀は嬉しがっている。

美紀の心に伝わるように

「なにを言つているの?…」

美紀は嬉しそうに

「だつて、天空のお酒と人間界のお酒つて違うのでしょ？それもレポートに書ける！」と笑い声が聞こえるから、聞こえない様にした。達也君が立ち上がり

「俺等の家に来ればあるよ？来る？」と言つてゐる。  
おもむろに透君に

「行つても良い？」と聞くと  
何も言わず頷いていた。

四人でマンションに戻り

私と美紀は、夜に行くと自分達の家に入つた。

私は美紀に

「ちょっとー美紀？人間界のお酒は強いのよ？酔つたらどうするの？」

美紀は楽しそうに

「これも、偵察よ！」と着替えていた。

私は溜め息をつきながら着替え

「シンセ様、今日は色々お許し下さい。人間とキスをしてしまい…  
それに入間界のお酒を呑みます」と心で話した。

私と美紀は一人の家の前に行き、インター ホンを押す。  
達也君が出て來た。

恐る恐る入ると、綺麗に片付いていた。

冷蔵庫を見ると、お酒が一本しか無かつた。

達也君が美紀に「買いに行ひつー」と家を出でいった。

私は透君が居ないと想い

開けてない部屋を覗いてみた…

そこには電気が付いてなく…

奥を入ると墮天使の姿をした透君が夜空を眺めていた。

天使と真逆で羽が黒く  
髪の毛も黒い…

でも殺気が全く感じない。  
むしろ優しさを感じる。

「透君…？」と言つと、驚いてこちらを向いた。

涙を流していたが、それは天使の涙で優しい眼差しだ。

私は部屋を閉めて天使の姿になり、透君を抱きしめた。  
「透君の姿は墮天使なのに、天使の涙を流しています…きっと心も  
天使のままなのでしょう。何故、そんなに悲しい天使の涙を流すの  
ですか？」

透くんは、天使の姿をした私を抱きしめ

「天使に未練がある…」と静かに話した…

私は透君の涙を指で拭きながら…

「私に話せる事なら、なんでも聞きます」

透君は私の姿を見て

「暗くて良く見えないけど、やつぱり愛子は天使なのだな」と笑つ  
ている。

私も笑つてしまい…

可哀想な透君…

こんなに見つめても、優しい眼差し…

・胸がズキズキ痛くなり、思わずキスをした。

透君も私を剥がさなかつた…

その時の私は、シンセ様の事をすっかり忘れていた…

私は唇を離し…透君の顔を見ると笑つていた。

「あ、思わずキスしてしまいました…」

透君は笑つて

「頑固で優しい天使のキスだな…」と言つ  
しばらく、二人で笑つていた。

玄関の音が聞こえ、私と透君は人間の姿に戻った。

透君から離れ夜空を眺める。

「だから、夜空が懐かしいのですね…お互い、正体は秘密にしましょう？卒業までは人間界に居ないといけないのです」

透君は後ろから

「その後は？」

夜空を見ながら

「今回は人間の偵察学で来ました。その期限が卒業までなのです…」

透君は落ち着いた様子で

「天空に戻るのか？」

私は「そうなります…」

透君が後ろから、私を抱きしめて

「離れたくない…せつかく逢えたのに」

その時、撻を思い出し…

しかも、透君は墮天使だ…でも、涙も心も天使だわ…  
シンセ様に怒られるわ…

部屋の外から呼んでいる声が聞こえる。

「帰つきましたね」と笑顔で話し

達也君と美紀の元に行く。

透君も来て、4人で乾杯をする。

一口呑んだら、天空の物とは全く違う味で

「こんな味…初めて。意外に美味しい！」と笑顔になる。

透君に笑顔を送ると、笑っていた。

お酒のペースも上がり、美紀は酔つて寝てしまった。

私も酔つていて、達也君と透君は笑っている。

透君の部屋に、ふらふらしながら入つてベッドで横になつていた。

透君が横に座り

「あの一人はリビングで寝たよ」

私は驚き起き上がる

「あ、此処は私のベッドじゃなかつたわ……」

透君は頭を撫でてくれ

「寝ていて良いよ。天空の話を聞かせてくれるか？」

私は頷き2人で横になり

「まだ、学園の薔薇の花畠はあるのか？」

「今、一番咲いているじやないですかね……私はいつも花畠に座つて眺めていますよ」

おもむろに透君は話しだした

「俺と達也は……主天使で狭間の調査に出て、事件に巻き込まれて墮天使の姿になつた。魔界に引き込まれたはずが、目が覚めたのが人間界だつた。墮天使で魔界に居るくらいなら、人間で暮らした方がましだから……花畠の近くに師匠の家があつて、良く遊んだよ。家族が天空にいる。子供も産まれる前だつたし、きっともう大きい子に育つているはずだ」

「私も天空に待つていて下さつていてる方がおります……でも、透君の事が気になるのです……」

透君を見つめていると、

部屋の中が雲に覆われた。

私は驚いて起き上がり身動きが取れない。

透君が片手で雲を消し去つた。

「今の雲はなに……？」

透君も驚いていたが、何も起きなかつた。

私は酔いが覚めてしまい……

透君は眠りに入つていた。

リビングに行くと、二人とも寝ている。

## ズキズキする気持ち 素直に話そう

私は雲が気になつて、天空に戻る。

庭園を歩く…

天使の姿でこんなに歩くのも久々だ…  
透君も達也君も…天使だったのだ。

狭間の事件つて何だろう。

しかし、墮天使との接触はまずい…

それに透君を見ていると胸がズキズキする。

学園の薔薇園に行き、花畠で座り込んでしまい涙を流していた。

「どの花も美しいわ…私は墮天使に恋をしてしまったのだろうか…  
すると、後ろから声がした

「アムエル？」

振り返るとシンセ様だった。

「シンセ様、どうしてここに？」

シンセ様は素敵なお方…

長髪に優しい眼差し…

「アムエルが来るのを待つっていた。逢いたかったよ  
私を強く抱きしめた。

涙が止まらず

「シンセ様…どうして私をフィアンセに？美しいお姉様方は沢山いらっしゃいます。私はまだ…見習いの身です。どうして、こんな私を？」

シンセ様は私の頬を流れる涙を触りながら

「アムエルの輝きは、他にない…それに見習いと言つても、もう嫁に來ても良い頃だろ？父上も母上も待ちわびている」と微笑む。

シンセ様は何故こんなに優しいのかしら…

「…嬉しいです。シンセ様？さつき、人間界の私の前に雲を作りま

せんでしたか？」

シンセ様は笑っていた。

でも、いつも優しく抱きしめてくれるのに、今日は強く抱きしめてくれて…

私を離さないようにしている。

「それにしても、人間の姿で生活か…学校はどうだ？」

私はシンセ様を見つめながら

「たまたま、横の席の人が不良で…」

シンセ様は笑いながら

「人間の男か…雲は見てられなかつたから

シンセ様に見られていたのね…

「シンセ様…私を許してくれるのですか？」

私の耳元で

「それは…アムエルを心から愛しているからに決まつていて

私はどうしたら良いのか…

「私は幸せ者です。無事に帰つて来ますから、待つていて下さいま

すか？」

不安な気持ちで見つめる。

シンセ様は私の髪の毛を触りながら

「無事に帰つて、私の元に一番に来なさい。安心したい」

私は素直な気持ちを伝えよう…

「シンセ様？人間界で恋をしても良いでじょつか…」

シンセ様は

「アムエル…話して『らん？』

話せなかつた…

シンセ様は抱きしめたまま

「さつきの男が気になるのか？」

頷く事しか出来なかつた。

シンセ様は笑いながら

「人間界に居る時は構わないよ…何事も経験だ。その代わり、戻ってきた時はフイアンセの事を愛するのだ。出来るか？」

シンセ様の目を見つめて

「はい。誓います。シンセ様？」この花を少しだけ、人間界に持つて行くのは駄目ですか？」

シンセ様は頷いた。

私は笑顔でシンセ様を見つめ、腕を見せる。

「シンセ様？ リング有難うござります。愛がこもっています…手作りなのですか？」

シンセ様は恥ずかしそうに

「作るのに大変だった。ダグエルが手作りにしようと言つから…」

私は笑顔になり

「メッセージも心に染みました。お返しに作りました」

シンセ様の腕に付けながら

「これは、シンセ様を想いながら作りました。シンセ様？ そろそろ戻らなければなりません。次に帰る時はここではなく、シンセ様の元に逢いに行きます」

シンセ様は私に優しくキスをしてくれた。

唇を離すと

「まだ、戻つてはならぬ…」

私はおもわぬ言葉で驚いて

「え？」と聞き直してしまった。

シンセ様は「約束の誓いのキスがまだじゃないか？」

私はシンセ様に

「愛する事を誓います…」とシンセ様にキスをした。

シンセ様はいつもの様に優しく抱きしめてくれた。

帰り際に花の蜜を唇につけた。



## 動きだした感情

部屋に戻ると、まだ皆は寝ていた。

寝ている透君にキスをした。

唇を離すと気付いていた。：

「おはようございます。天空に行つてきました。花畠の花を持つて  
きたかったのですが、駄目でした。その変わり、花の蜜の味を」

透君は優しい目で

「懐かしい蜜の味だ……」

急に抱きしめられ

「菅野愛子という人間の姿をした天使を……初めて見た時から、気になつていた。強い様で弱い。見捨てられなかつた……人間界に居る間は、隣に居てくれないか？」

私は頷く事しかできなかつた。

シンセ様…申し訳ありません…

気付くと、抱き合つたまま寝てしまつた。

誰かに叩き起こされ、目を開けると美紀と達也君だつた。

「愛子？なに抱き合つて寝ているの？…」

達也君は透君を起こしていた。

「気付いたら寝ちゃつた…二人とも寝ちゃつたのだもの」

リビングに行き、美紀と見つめ合つて心で会話する。

美紀は怒りながら

「人間と抱き合つて寝るなんて、許される事じやないわよ

私は溜め息をつきながら

「私は、透君に恋をしたみたい…」

美紀は驚いて、更に怒つた。

「人間に恋なんて、撻を破るつもり？！」

私は美紀を落ち着かせようと

「皆が寝て いる間に、天空に行つてきたの。シンセ様に話したわ。人間界にいる時は、何事も経験だから恋もして良いと許してくれたわ」

更に怒らせてしまった。

「それは、シンセ様がお優しい方だからだけよ！」

美紀にはお願いするしかない…

「とりあえず、内緒にして？天空に戻った時はシンセ様を愛する誓いもしてきたの」

美紀は呆れて、私の頭を叩く

「どうなつても知らないよ？」

私は頷きながら

「…うん」

透君と達也君は私達が見つめ合つて  
顔の表情だけ変わつて いるのを笑つて見て いた。

美紀が急に心に話しかけて きた。

「でも… 気持ちは分かるわ。私も達也君、素敵だと思つもの… 私も  
ダグエル様に聞いてみようかしら」

私は逆に驚いて しまい

「ダグ様は絶対に嫉妬するでしょ？！怒るわ！」

美紀は肩を落として

「シンセ様だつて… 嫉妬はしているはずだわ」

私も肩を落として しま…

「確かにそうかもしねないわ…」

二人で頭を上げられなくなつてしまつた。

急に美紀が顔を上げて

「今から、天空に行つてくるわー 素直な気持ちをダグエル様に話で  
くる。だから、偵察学が終わつたらお嫁にして下さいって言つてく  
る」と語りかけて きて。

美紀は急に立ち上がり、達也君と透君に  
「ちょっと出かけてきます」と出でいった。

達也君が笑つて、喋り出した。

「全部、丸聞こえだよ？」

驚きながら

「あ…そうですね」と苦笑い。

達也君は横に座り

「今、透から聞いたよ？俺等の事知つたみたいだね。美紀は知らないのだろう？話すか…黙つていいか…」

私は悩みながら

「黙つていた方が良いかもしれません。墮天使になつてしまつたお二人に接触したのは、偶然でしたが…受け入れたのは私です。彼女に責任は無いでしょう。責任は全て私が背負います…天空に戻つて罰せられるのは私だけで十分です」と言つと

透君は私を抱きしめた。

「墮天使で申し訳ない…」

私は笑顔で答える。

「人間でも墮天使でも、綻を破る事になります。でも、透君の事が好きなのです…」

達也君は笑つていた。

私は立ち上がり

「とりあえず、家に戻りますね」と家を出て自分の家に戻る。

## 別れと裁きを受ける気持ち

家で罰せられる時の事を考えていると

ミルエルがダグ様に連れられて家に戻ってきた。

シンセ様も一緒に…。

ダグ様は私に近寄り、頬を叩いた。

「ミルエルを巻き込むな」

ダグ様の顔は怒っていた…

ミルエルはダグ様を抑えて

「アムエルに巻き込まれた訳じゃなく、私の気持ちをお伝えしたかつただけなのです」

ダグ様はミルエルを今すぐ連れて戻り、結婚させると言っている。

私は三人に申し訳なくなり、涙を流し三人の前に座つた。

「申し訳ありません。私が恋した相手は人間ではなく、墮天使であります。しかし、その者は天使の涙を流し…天使の心を今でも持つております。2人おりますが2人とも、狭間という事件に巻き込まれた、主天使様だとお聞きしました」

シンセ様は私を強く抱きしめて

「もう言わなくて良い…」

私はシンセ様に抱きしめられながら

「シンセ様にも嘘をついてしまいました。墮天使というのは私しか知りません。ミルエルは人間としか思つておりませんでした。私を罰する場に連れていくつて下さい。天使になる資格が御座いません。その者に別れを告げてきます。少々お待ちを…」

天使の姿のまま、達也君と透君の前に移動した。

私は達也君と透君の前に移動し

「お一人方、申し訳ありません。私が透君に恋をした為に…墮天使

との接触が分かつてしましました

2人は私の姿を見て驚いている。

涙を流しながら見つめ…

「透様…私は貴方の事が好きです。しかし、人間でも墮天使でも…恋をしてはいけない相手なのは分かつてらつしゃいますよね…私はここを去ります。天空で罰せられる事でしょう。そのご心配はなさらず、透様と達也様…どうかこの人間界で疲れ果てぬ様に見守つております」

透様は私の姿を見て、笑顔でいた。

「君は綺麗だ。菅野愛子と言う名前は勿体ないな…天使の名は?」

私は涙を流しながら

「アムエルです…美紀はミルエルです…」

透様は溜め息をつきながら

「アムエルか…良い名だ。君には婚約者がいるね?」

私は驚き

「どうして、分かるのですか?」

透様は笑いながら

「君の羽はピンクに染まっている。それは選ばれた者にしか生えない羽だ。そんな君を一人で居させる奴はいない…本気で相手が君を好きなのかは、保証出来ない。だけど俺というと、君も墮天使になつてしまふ…」

「透様の墮天使の姿も素敵です」

2人は墮天使の姿になり、墮天使の姿も素敵だつた。

透様は私を抱きしめて

「アムエル…ずっと愛している。いつかまた出逢えたら、その時は離さないからな」と頭を撫でてくれる。

私は涙を流して笑いながら

「私も透様を愛していました。またいつか…」

その時、部屋中に白い雲が現れた。

私は驚いて透様から離れ、身動きが取れない。

透様は、その雲を片手で消し去った。

そこに現れたのは、シンセ様とダグ様とミルエルだった。

「シンセ様…」

シンセ様は透様と達也様に

「人間界に墮天使が隠れて生活しているとは…驚きだな」

透様はまともに話をしようとしている。

「墮天使になるくらいなら、人間の身になつた方がましだ。君がアムエルの妃アンセか？」

シンセ様は2人の前に座り

「墮天使の姿になつても、天使に未練があるようですね。お名前を聞いても宜しいでしょうか？」

透様は達也様を見て

「……ルシフェルだ。隣はタニエルだ」

シンセ様とダグ様は驚きながら、シンセ様は話し出した。

「狭間での事件で行方が分からなくなつていたお方達でしたか…未練があつてもおかしくないです。主天使様の連續行方不明で未だに解決する事が出来ず…主天使様が度々、行方不明になつておられます。何があつたのか教えて頂けませんか？」

透様は

「でも、君がここに来たのは、アムエルを迎えて来たのだろう？」

シンセ様は私の肩に手を置き

「アムエルは、未熟で恋をまともに知りません。これからゆっくり教えていくつもりでしたが、ルシフェル様に気が向き始め、私自身どうしたら良いのか分からなくなつておりました」

透様は

「つまり、君はアムエルを愛しているのだね？」

シンセ様は頭を下げ

「その通りです」

透様は

「それが目的なら、アムエルを連れて行きなさい。幸せにしてあげるのです」

シンセ様は続けて話す

「例の事件の事をどうか…父上は主天使をまとめて居る者です。ルシフェル様とタニエル様が最後まで戦い抜いた事は、父上から良く聞いています。そして何よりも一番愛した弟子達だったと「私は驚いて

「透様と達也様は、そんなに大きな事件に巻き込まれたのですか?」透様は

「その名はもう言わなくて良い、ルシフェルと呼びなさい」

ルシフェル様はシンセ様に

「つまり…ムドラー様のご氏族なのですね?ムドラー様との思い出は、いつも頭から離れません。この体になつても…心は蝕まれていません。神の優しさなのか…試練を与えて下さっているのか…ムドラー様には、今でも感謝の気持ちで胸が張り裂けそうです…」とルシフェル様は涙を流した。

タニエル様も涙を流して

「ムドラー様のご氏族にお逢い出来ただけで、人間界で生きていく糧を頂けました…」

シンセ様は

「事件の糸口になる事なら、何でも教えてください…」と頭を下げる。

ルシフェル様は

「今は、アムエルとミルエルを天空に連れて帰りなさい。そしてムドラー様に、ルシフェルとタニエルは堕天使になつても天使の心を忘れず、人間界で人間として生活していると伝えてくれ」

ルシフェル様はタニエル様と目を合わせ

「その後に、事件の分かる範囲の話はいくらでもする。アムエル君といった時間は楽しかった。シンセ殿に幸せにしてもらいなさい」私は涙を流す事しか出来なかつた。

タニエル様は「ミルエル…幸せに」と  
シンセ様とダグエル様は私達を連れて、天空に戻った。

私は裁きを受ける者、愛する資格などありません（前書き）

愛する事に資格が必要なら、私が愛する資格を『えよ』…

天空の掟を破つてしまつたアムエルは  
シンセとダグエルに裁きの元にとお願いをする。  
しかし、シンセとダグエルはアムエルとミルエルがまだ未熟だと言い  
シンセは墮天使の接触を自身の父に話す事になる。

私は裁きを受ける者、愛する資格などありません

天空に戻り…

「シンセ様：ダグ様、私は撻を破りました。どうか私を裁きの元に連れてって下さい」

シンセ様とダグ様は、花畠に連れてきてくれた。

「アムエルもミルエルも未熟なのだ…失敗は起きるもの。今回の事は私とダグエルしか知らない。ルシフェル様とタニエル様に感謝して、今後は僕達の事を愛するのだ。良いね？アムエルは誓いを忘れていいな？2人は墮天使の姿になつても、心は蝕まれていないうちの心だ。それはどうゆう意味か分かるか？」

私達は顔を横に振った。

頭を撫でられ

「それは、神に命を捧げる覚悟で天使を全うした。という意味だ。少しの隙もあれば、天使は悪の心で染まってしまう…ルシフェル様とタニエル様の接触は私とダグエルに処分が来るであろう。父上に話をするから、アムエルは大人しく私の部屋で待ちなさい」

ダグエル様は

「ミルエルは私の嫁に来なさい。今後二人は、仲良く天使の仲間として暮らすのだ」

ダグエル様はミルエルを連れて家に向かって行つた。手を繋ぎ、シンセ様の家に着いた。

シンセ様は私の涙を拭き取つてくれた。

「もう、泣かなくて良い。笑いなさい」と家に入った。

シンセ様の父上も母上も歓迎してくれ、とても嬉しかつた。父上に話があると言い、書斎に移動した。

「人間界で墮天使と逢いました」

ムドラー様は驚いて

「人間界に墮天使が居るのか？！」と慌てていた。

シンセ様は

「しかし、その者の心は天使のままで悪に染まつていませんでした」

ムドラー様は考え

「その者は神に忠誠を誓つた者だ…今時めずらしい。何故、その者が墮天使になつたのか？」

シンセ様は私を見て

「私も名前を聞いて驚きましたが、その者の名はルシフェルとタニエル…」

ムドラー様は

「ルシフェルとタニエルが、墮天使に？！人間界で何をしているのだ？！」

「墮天使になるくらいなら、人間の姿で暮らしている方が良いと…それに、父上との思い出を今でも思い返している様です。涙を流していましたが、その涙も天使の涙でした」

ムドラー様は驚いていた。

「狭間の事件と関係があるのか？」

「自分の語ることは、全て話すと。今回はアムエルとミルエルを迎えて行つたので、父上に相談をしてからと…」

ムドラー様は私に聞いてきた

「ルシフェルとタニエルとは何処で知り合つたのか？」

私は顔を上げ、ムドラー様に話をした。

「学園の偵察学です。高校に転入生として、私とミルエルが偵察に入りました。ルシフェル様もタニエル様も人間の姿でした。ですが墮天使の姿を見てしまい…昔の話を聞き、夜空を眺めて涙を流していました。墮天使との接触は偶然ながらも、私が引き起こした事です。シンセ様ではなく私を罰して下さい」

ムドラー様は考えた様子で

「会議を開く、二人は部屋に居なさい。一步も外に出ぬように…ダ

グエルとミルエルにも伝えておく。しかし、ルシフェルとタニエルが未だに私を忘れないで居てくれていたとは…良い弟子を持った」と家を出て行つた。

私とシンセ様は部屋に行き、話をしていた。

「シンセ様：今回の偵察学は、私は処分になりますね。人間の偵察で…まだ途中でしたから」

シンセ様は窓の外を眺めながら

「父上が何とかしてくれるだろう。今は待つしかない。誓いは忘れないかな?」

私は頷く。

シンセ様は

「笑顔じゃない…誓えないのか?」

私は顔を横に振り

「誓えます。しかし、私は…裁かれなければいけない者です。それに、シンセ様を愛する資格がありません…」

涙を流すと

「資格なんかいるものか?私はアムエルを愛している…資格がいるならば私が資格を与えよう…愛せるか?」

私はシンセ様に抱きつき

「愛せます。命がある限り…」

## 神の審判 幸運の天使達（前書き）

人間界でシンセの父上のムドラの愛した一番弟子のルシフェルとタニエルに再会する。

狹間の事件の真相を聞くか、会議が行われ

ルシフェルとタニエルは隠密に神殿に行くことになった。

堕天使から主天使に戻れるのか…

## 神の審判 幸運の天使達

その頃、緊急会議が行われている。ムドラ様は私達の話をしていた。

狭間の事件の真相を墮天使になつてしまつた、ルシフェルとタニエルに話を聞くかどうかと審議が行われている。

「墮天使は所詮、墮天使だ」と言う者もいれば、

「心も涙も悪に染まつていない墮天使なら、まだ糸口が開けるのではないか」と言う者も。

その時、神の使いの者が入室し

「その者の話を聞く必要がある。天空に連れてくるのだ。眞実を語るならば天使に戻る事が出来る。偽りを語るならば処分する。ムドラ、そなたがルシフェルとタニエルの元に行き、話をしてきてくれぬか…？そなたの一番弟子だ」と言い、神の使いは部屋を去つた。神の使いは普段、姿を表す事無い。

これは神の御告と信じ、真相を究明する事となつた。

ムドラ様は私達の元に戻られ

「アムエルよ。良くルシフェルとタニエルに出逢つてくれた。そなたのお陰で、もう一度弟子に逢える。アムエルの偵察学は審議が終わるまで、事務局に待つてもらつから安心しなさい」

ムドラ様はシンセに話をした。

「シンセよ。ルシフェルとタニエルの元に連れて行ってくれぬか？」

シンセ様は私の頭を撫で

「部屋に居なさい」と二人は消えていった。

「ルシフェル様…タニエル様…どうかご無事で」

2人の部屋にシンセとムドラが現れ、2人は驚いている。

ムドラは2人に墮天使の姿を見せてくれと頼んでいた。

2人は天使のムドラに

「墮天使の姿を見せられない」と言つてゐる。

ムドラは

「ルシフェルとタニエルの姿は墮天使でも、心が天使のままなら幸せな事はない」と言つ。

ルシフェルとタニエルは涙を流しながら、墮天使の姿になる。

ムドラは墮天使の姿を見て驚きを隠せないが  
流れる涙が天使の涙だと分かり、事情を説明した。

「神の使いの者が、当時起きた事件の事をルシフェルとタニエルから聞きたいそうだ。ルシフェルとタニエルが眞実を語るならば天使に戻る事が出来る。偽りを語るならば処分される。神の使いが申すのだから、神の御告だ。一緒に来てくれぬか?」

ルシフェルとタニエルは

「天空の世界に、墮天使の私達など入る権限がありません。清らかな場所を汚す事になります」と頭を下げる。

ムドラは「神の申し付けだ…神にも考えがあるのだろう。私を信じてくれぬか?」

ルシフェルとタニエルは考へ、墮天使の姿で隠密に天空に行くことになった。

隠密で行われる会議には

神の使いの真ん中にルシフェルとタニエル。  
後ろにムドラとシンセとダグエルが座つた。

審議が始まつた

「ルシフェルとタニエルよ。兩人は墮天使の姿になつても、悪に染まらぬ心と涙をもつておる。眞実を語れるか?」

ルシフェルは静かに

「私が見た物全てを語ることが出来ます」

「何を見たのか教えてくれよう

ルシフェルは話しだした

「私は、狭間の事件の真相を調べるべく、タニエル率いる仲間と調査を行なつておりました。すると突然、辺りが真っ暗になり、一瞬にして魔界に引き込まれました。そこにいたのは魔界の王でした。天使の私達は全身全霊で戦い抜きましたが、最後に残つたのは私とタニエルでした。魔界の王は私達に天空を滅ぼすと言い、そこには大天使だったラシス様も一緒におられました。ラシス様は天使の心を持つたまま、魔界の王と手を結んでいた様でした」

タニエルが話だし

「私とルシフェルに、天空…そして神までを殺めると言い。ラシス様に私とルシフェルは殺められました。しかし、目覚めたのは人間界で人間の姿でした。墮天使の姿になるまで、かなりの時間が掛かりましたが…魔界の剣で刺されたので墮天使の姿に…殺めたラシス様は天使の心を持っていました。なので、私も天使の心を持つたままでいられるのかもしれません。私とルシフェルは神に忠誠を誓つた者です。私達自身の心が魔に勝つたのだと信じています」

神の使いは、それが全てか?と聞き

神の審判を行うと言つた。

そして、中心に居る神の使いが

「お主達の心は、忠誠を誓つたから天使の心なのである」

その瞬間、ルシフェルとタニエルの周りが光を放たれた。

ルシフェルとタニエルの姿が墮天使から主天使の姿に変わつた。

神の使いは

「お主達の言つことは、全て神は知つていた様だ。それを知らせる為にお主達を人間界に逃がし、アムエルという幸運の天使に逢わせた様だ。神はお主達が天空に帰つて来る事を分かっていた。そして、魔界の王とラシスと戦うべく、今日から特訓をし、再度狭間の戦いにあたりなさい。何より、無事に帰つて来た事を家族に報告しなさい」

神の使いは

「アムエルの罪は無い」

「シンセとダグエルよ。お主達も特訓をし、ルシフェルとタニエルと共に狭間の戦いにあたりなさい。今後、両人の妻になるアムエルとミルエルも偉大なる力を持つている。ムドラの元で修行をさせなさい」

隠密に開かれた会議は終了した。

ムドラとルシフェルとタニエルは抱き合い、涙を流していた。

ムドラは涙を流し

「主天使に戻れ、地位も戻った。二人共、奥さんの元に戻りなさい。そして、私の元で修行をするのです」

ルシフェルとタニエルは頭を下げ

「私達を救つて頂き、有難う御座います」

ルシフェルは

「シンセ殿。ダグエル殿。アムエルとミルエルに出逢えた事で、天使に戻る事が出来た。兩人を頼んだ…そして、共に戦おう。アムエルにはシンセ殿から感謝を伝えてくれ、ミルエルにはダグエル殿から。彼女達は幸運の天使だ」と言い家に向かった。

神に忠誠を誓い、一人の愛を深める誓い（前書き）

堕天使からの復活。

それぞれの道に…

それぞれ、これから戦いの為に修行が始まる。

## 神に忠誠を誓い、一人の愛を深める誓い

私は心配をしながら、シンセ様の母上と帰りを待っていた。

扉が開き、シンセ様が無事に戻られ安心し抱きしめた。

「無事に帰られて、安心しました…」

シンセ様も私を強く抱きしめてくれた。

ムドラー様から全ての話を聞き、ルシフェル様とタニエル様が主天使に戻られた事も。

今後、ルシフェル様とタニエル様、シンセ様とダグエル様、私とミルエルも狭間の戦いで

ムドラー様の元で修行をする事も。

ムドラー様は私に

「今日から、シンセと同じ部屋で生活しなさい。アムエルは一人で暮らしておるの?」

私は頭を下げ

「はい。私は両親が分かりません…育ての親が私を見つけたのは学園の花畠だそうで、学園に入った頃には一人で暮らし始めました」

ムドラー様は

「これから、修行の日々が続く。2人の結婚を直ぐにしよう。後に伸ばせない」

シンセ様は私に

「ルシフェル様はアムエルに感謝を伝えてくれと。天空に居る家族の元に帰ったから安心しなさい」

私は涙が溢れた。

私の荷物はシンセ様の家の手伝いさんが運んでくれた。

私とミルエルは偵察学の全てを偽りなく書いた。

シンセ様とダグ様は横で見守つて居てくれる。

私は思い出し

「ダグエル様は…ミルエルを想つていてくれたのですね」と言つと  
ダグエル様は恥ずかしそうにしていた。

シンセ様は笑つていた。

「学園に提出してきます」と2人で家を出て、事務局に渡す。

事務局の人は

「アムエルとミルエルの物は提出しなくて良いと連絡があつたから、  
2人は無事卒業よ」

2人で抱き合つて喜んだ。

事務局の人が本の山を差し出した。

「次の課題はこれ。2人共、全て自分の力にしなさい。これからのは  
糧になるでしょう」

私達は本を受け取り、お互い家に急いで帰つた。

その途中に、ルシフェル様が奥様とお子さんと思われる人と笑顔で  
歩いていた。

「これでお互い幸せなのですね…」

家に着き、シンセ様に本を見せると全く読んだ事が無いと言つてい  
た。

ベッドに入つて、本を呼んでいるシンセ様。

普段、見る事は無かつた姿。

私はシンセ様の横に座り

「シンセ様？今日から宜しくお願ひします」と頭を下げた。

シンセ様は優しい眼差しで

「アムエルが来るのを待つていたよ。嫉妬してしまつた事も申し訳  
ない」と抱きしめてくれた。

私は「嫉妬ですか？」

シンセ様は笑いながら

「分からぬなら良い。これから、戦いにお互い出るのだ。神に忠誠を誓い、お互全力で戦うのだ。お互の愛を深めつつ… 2人の誓いだ」

シンセ様は心から優しい方なのだと安心した。

## 聖なる魔法の修行の始まり（前書き）

学園の事務局から貰つた、聖なる魔法の書を貰い  
ムドラー様に見せると、外で読みなさいと。

人間界で別れた、ルシフェルとタニエルに再会し  
お互に修行を頑張りうとまた仲間になる。

聖なる魔法を使う師匠が現れ  
これからどうなっていくか…

## 聖なる魔法の修行の始まり

次の日から、ムドラ様の元で修行が始まった。

しかし、事務局で貰つた本を見せると

「2人共、外で読みなさい」と言われただけだ。

花畠に行き本を読み始める。

私は本を見て

「特別な天使にしか使えない、聖なる魔法と書いてあるわ」

2人で声を合わせて

一行目の聖なる魔法を唱えてみると何も起きない。

ミルエルは首を傾げ

「読み方が間違えているのでは?」と2人で不安になる。

すると空から何かが飛んできた

2人で「杖?」と首を傾げ

杖を持つて聖なる魔法を読むと、池の水が全て中に浮いた。

私は驚きで杖を放してしまい、池の水は池に落ちた。

本には「水の書」と書いてある。

ミルエルは「水を操る、聖なる魔法なのね…」と呟いていた。

私は他の本を見てみると

「火の書」

「風の書」

「土の書」

「幸せの書」

「空間の書」とあった。

私はミルエルに

「全てを覚えるのに時間が掛かりそうだわ…」

その時、愛子と美紀と呼ばれ

振り返ると、ルシフェル様とタニエル様だった。

私は笑顔になつて

「ルシフェル様とタニエル様！お話はムドラ様から聞きました。人間界で見た姿と全く違つて…印象も違います」

二人は横に座り

「まさか…もう一度、ここに帰つて来られるとは思つていなかつた。全てアムエルとミルエルのお陰だよ。感謝している」

私はルシフェル様に

「蜜の味はいりませんでしたね」と笑うと、頭を叩かれた。

ミルエルは2人に

「奥さんにも逢えましたか？」と聞くと

ルシフェル様は恥ずかしそうに

「逢えたよ。子供はすっかり大きくなつていた。人間界とは時間の流れが違うようだ…タニエルには子供は居ないから。人間界でアムエルとミルエルに出逢えた事。ムドラ様に再会できた事。何より家族に再会できた事。ただ、これから修行をして狭間の調査に出ないといけない。それは調査じゃなく、戦いだ。アムエルもタニエルも聖なる魔法を使うのだな。偉大なる力を持っていると聞いた。これからも仲間だ。宜しく」と人間界の時の様にたわいもない会話をし、二人はムドラ様の元に行つた。

「私達も頑張らないとね…」

私もミルエルも何時間経つたのか分からず、夢中に読んでいると

1人の大天使が現れた。

「そなた達よ。聖なる魔法をここで使うのは危ない。私の元に来なさい」

ミルエル

「大天使様：貴方はどなたですか？」

その大天使様は

「その本を作った者だ」

私は驚いて

「貴方がこの本を?」

すると、シンセ様とダグエル様が現れ挨拶をしている。

「この者達を少し、私の元で修行せしむ」

シンセ様は私にキスをし

「あの方について行きなさい」

言われる通り、大天使様の後についていった。

そのお方の名はカシエス様と言つ。

家の中は色んな聖なる魔法の本が並んでいた。

カシエス様は飲み物を出し

「まずは聖なる魔法を身に染みさせるのに、これをお飲みなさい」見ると毒の様な色をしていた。

ミルエルは

「これは飲めない……」と耳元で言つ。

私も流石に

「飲むのが怖いわ」と耳元で話すと

カシエス様は怒りながら

「聞こえておる!私の作った物が飲めないのか?!

私達は驚き

「い……いえ」

カシエス様は

「勿体ぶらずに、飲みなさい!」

私達は勇気を出して、一気に飲み干す。

凄く苦い……と、頭がフラフラして倒れ込んでしまった。

カシエス様は

「こんな、小娘達が聖なる魔法を操れるのかね……」と呆れている。

何時間、気を失っていたか…

気付くと部屋に私とミルエルだけだった。

「ミルエル？起きて！」と揺らすと目が覚めた様だ。

右手の中指に指輪がはめてある事に気付き。

2人で

「あれ？取れない…」

カシエス様が現れ

「その指輪は、聖なる魔法を使うのに必要だ。一人から離れる事は無いだろう。明日からは、水、火、風、土、幸せ、空間の魔法を学ばせる」

私は

「幸せですか？」

カシエス様は

「全てに与える愛じゃ、一人はまだ愛を知らない様だね…時間が解決してくれるだろう。もう帰りなさい。二人の帰りを待っている者がある」と水晶を見て笑っている。

帰り道…薄暗い森を抜け、夜の道を歩いていた。

途中でミルエルと別れ、指輪が光を放ち家の方角を指している。その光に着いて行くと家に着いた。

「この指輪は凄い…」

家に入り、部屋に戻る。

シンセ様は窓から月を見ていた。

「シンセ様、今帰りました」

シンセ様は私を見て驚いていた。

「何がありましたか？」と首を傾げると

「自分の姿を見ていないのか？」と鏡の前に立たされた。

私は驚いた。

「シンセ様？以前より羽の色が濃くなりました…正装の色も…髪の

毛が輝いています…」

今日の出来事を話し、指輪の話も。全てに与える愛を知らない事も…

シンセ様は

「私の事を愛しているか？」

私はシンセ様を見つめて

「シンセ様の事を愛しております」

シンセ様は

「体に愛を教えなればならないな」と歩き出した。

「体に愛とは…何ですか?」と廊下を歩きながら聞く。

シンセ様は優しい眼差しで微笑みながら

「体で、愛し合つてことだ。部屋に戻りつ」と歩く。

私は、天使の正装がこんなに色づくと思わず

シャワーを浴びパジャマに着替えた。

シンセ様の横に入ると、私の手を触り指輪を見ていた。

「6色に輝く指輪か…確かに取れないな

「でも、力を与えてくださいます。私はシンセ様の役に立ちたいの

です」と笑顔で話すと

シンセ様は優しい眼差しで

「私に体を委ねてくれるか?」と私の頬にキスをした。

「愛を教えてくださいますか?」

シンセ様は優しく、私の心に愛を与えて下さった。

私は幸せに満ちて、シンセ様の胸の中で眠りに入った。

操りられた夢（前書き）

夢の片との戦いのはじまり

## 操られた夢

私は夢の中で、滅びた城の中を歩いていた。何処からか呼ぶ声が聞こえてくる。

「アムエル…そなたの操る聖なる魔法は、そちらの世界で使うものじゃない。こちらの世界に来るのだ。まあこちらに来い！」

同時に物凄い数のカラスが飛んできた。

私は驚いて飛び起きた。

胸が驚きでドキドキしている。

「まだ、朝日が出ていないわ。今の夢は何だったのだ？…」

怖くてシンセ様に近づくと、抱きしめてくれた。

また夢に入ると同じ夢を見る。

「誰が呼んでいるの？」

私は夢の中で声の主の元に歩いていた。

他の声も聞こえてきた。

「今度は誰ですか？」

私は頬を叩かれ、目が覚めた。

ここは部屋じゃない。

目の前にいるのは、シンセ様とカシェス様だ。

「一体、何が起きたのですか…？」

シンセ様は私を抱きながら

「気付いたらアムエルが隣に居ないから、探したら森の方に歩いていた…声が呼んでいると直つていのだ。急いで、カシェス様の元に連れてきたのだ」

カシェス様は、水晶を見ながら悩んでいた。

「アムエル、お主の見た夢で何を言われた？」

私は夢の話をした

「私の操る聖なる魔法は、天空の世界では使つものじゃないと……」  
ちらの世界に来なさい。と言われました

カシロス様は悩みながら

「お主の夢で居た場所は魔界だ。こんなに早く、お主に手を出して  
くるとは……夢魔の仕業か？お主の力を欲しがっているのかもしれない。  
危険だ……夢の中で惑わされている。アムエル……お主は今後、夢の主  
とひたすら戦う事になるだろ？決して惑わされてはいけない。危  
なくなつたら力を使うのだ。お主の力は紙一重で世界を変えてしま  
う程の威力がある。気を付けなさい。それに、早く正装を着なさい。  
シンセ様はお戻り下さい。修行をさせます」

私は驚きながら

「シンセ様……心配おかけしました」と頭を下げると、安心してく  
れたのか

「今度はちゃんと守るから……」と不安そうに家を出でていった。

「アムエル！お主が気を引き締め無いから、操られるのだ…シンセ様も心配で修行に身が入らなかつたらどうする？…」怒りながら部屋をぐるぐると歩いている。

カシェス様は怒ると怖い…

「師匠様、紙一重とはどうゆう意味ですか？」

更に怒り

「聖なる魔法と魔の魔法は、紙一重なのだ。今は身を守る為に自分の周りを守護する魔法を教える。簡単だ。一言で覚えなさい」

カシェス様は

「エンジェル・プロテクション」と呟え

カシェス様の周りに白い壁が出来た。

「これは自分の身だけでなく、杖で守りたい者をさせば守る事も出来る。さ、やつていらっしゃい」

私は小さい声で

「エンジェル・プロテクション」と呟つと

白い霧が現れ、もやもやと空に消えていった…失敗。

カシェス様は

「一度で成功させないと、言つたじやないか！声に出さなくてても良い。心の中で強く唱えなさい」

「…はい」

溜め息をついて落ちつこへ。

心の中で、強い気持ちで唱える。自分の周りが光で囲まれた。

驚きと成功の喜びで笑顔になると、光が消えた。

「何時やめて良いと言つた？！精神を集中させなさい。座つて唱え、日が落ちるまで維持させなさい。私は昨日の飲み物を作つてくる」ミルエルが来た。

カシエス様はミルエルにも同じ聖なる魔法を教えている。

二人で

「え…あの、苦い飲み物？」

泣きそうになりながら、シンセ様の為にもルシフェル様の為にも、私を愛している人。

この世界の全ての生き物に愛を…

聖なる魔法を唱え、精神を維持させる。

どんどん力が抜けていく…

聖なる魔法にも力がいるのね…

何処からか、苦い臭いがしてきた…嫌な予感しかしない。

ミルエルが

「苦い臭いがする…嫌な予感だわ」

二人共、光が消えかかっている。また精神を集中させ、元に戻す。

カシエス様が、遠くから

「少し、休憩しなさい。その前にこちらでこれを飲みなさい」

カシエス様の前に行くと、また昨日の飲み物が置いてある。

「早く飲んで、休憩をしなさい。また飲めないなど言わぬ様に」私達は勇気を出して、飲み干した。

私は

「苦い…でも力が戻つてくる。この飲み物は凄い」

ミルエル

「師匠様？これは何が入っているのですか？」

カシエス様は

「材料を聞いたら、お前達は飲まなくなるから言わん」

カシエス様の家を出て、森を見る。

木漏れ日が美しい。

全て生きている生命なのだ。

生きている全てのものに愛を注いで。

指輪が光っている…

「ん？ 何処からか声が聞こえる」

私はミルエルに声を掛ける

「ミルエル？ 何か呼んだ？」

遠くで顔を横に振っている。

「アムエル様？ アムエル様？」

私は森の中で色々な所を見渡し

「誰が呼んでいるの？」

鳥が私の肩にとまつた。

「肩にいるよ？ アムエル様が生きるもの全てに愛を注がれたから、声が聞こえて話が出来るのだよ」

「そうだよ、そうだよ」と色々な所から声がする。

私は笑顔で話をしていた。

ミルエルが、どうしたの？と聞いてきた。

「全て命のあるものと会話が出来る様になつたわ」と話すと驚いていた。

帰る間際にミルエルが

「ダグ様がね？ この間、アムエルの頬を殴つてしまつて申し訳ないと、伝えてくれつて… 言いにくいみたいなの」

私は笑いながら

「私が悪いのに… 私が悪いですからと伝えて」と別れた。

家に帰り、シンセ様の元に行く。

「朝は、ご心配おかげしました」と抱きつくる。

シンセ様は何も言わず微笑んでいた。

正装が「くすぐったい」と笑っている。

「キュア」と唱え、シンセ様の体に触れる。

「シンセ様、お疲れの様ですね」

シンセ様は

「力が戻つてくる。それが聖なる魔法なのか?」と笑つている。

私は喜んで

「それに、命のあるものと会話が出来るようになりました。シンセ様の正装がくすぐつたいたって言つていますよ」と笑う。

シンセ様は

「ミルエルも同じなのか?」と首を傾げる。

私は顔を横に振り

「いえ、私だけの様です。夢も私だけ…何が違うのでしょうか?」

シンセ様は考え込んでしまった。

私は帰りの話を思い出し

「あ、ダグエルさまが、こないだ頬を叩いて申し訳ないとミルエルから聞きました」

シンセ様が振り向き、私の頭を撫でながら

「この間、ダグエルに相談したのだ。アムエルが人間界で恋をしたい事を許してしまつた。そしたら、ダグエルが怒つてね…フィアンセが居るのにとね。でも、アムエルには色んな経験をして欲しいと思つたから。私の心は複雑でね…アムエルを心から愛しているから

私は嬉しくて涙が溢れる…

シンセ様は

「涙が輝いている…」

寝る前になり、布団に入ると

ベッドさんが

「ここはシンセ様だけが寝る場所だから、アムエルは床で寝てよー」と言つてゐる。

「そんな、一人増えたつて良いじゃない?」

ベッドさんは

「私はシンセ様が小さい頃から、使つて頂いているのー・シンセ様だけの物なのー」と言つてゐる。

シンセ様が

「何と話してゐるの?」と聞いてきた。

笑いながら

「ベッドさんと、シンセ様だけの物だから床で寝てと申つのです」とシンセ様に抱きつくる。

シンセ様が

「ベッドさん…大事な嫁さんだから許してあげて?」

私も

「ベッドさん…許して?」

ベッドさんは

「シンセ様が言つなりじゅうがないわ…許してあげる

「ベッドさん有難う…」と笑う。

## つかの間の幸せ 梦の中で魔との戦い（前書き）

修行の中でシンセはアムホールにお子を産んで欲しいと言つ  
アムホールは幸せになるが  
夢の中で魔との戦いでシンセが操られてしまつ

## つかの間の幸せ 夢の中で魔との戦い

シンセ様が耳元で急に

「戦いの前にお子が欲しい」と言い出した。

私は驚いて

「戦いの前に…？修行の毎日なのですよ？」

シンセ様は

「戦いに必ずしも両方が帰れるか保証出来ない。それはダグエルも言っていた」

「ダグエル様が？」

シンセ様は笑いながら

「戦いの前に、ミルエルにお子を産ませると」

微笑みながら

「同時期にお子が産まれたら、学園の同期ですね」と笑った。  
私は笑顔だった。

「でも、ルシフェル様とタニエル様に出逢ってくれてなかつたら、父上もずっと消えた弟子の事を悲しんでいた事だらう…」  
頷く事しか出来なかつた。

「そろそろ、寝ないといけませんね？」

シンセ様は心配そうに見つめてくる。

「アムエル大丈夫か？今夜も夢を見るかも知れない」  
私は、すっかり忘れていた。

「でも、カシエス様に少し聖なる魔法を教えて貰つたので、どうにかなりそうです。もうご心配はかけたくないので…勝ちます！」

シンセ様は笑顔でベッドに潜つた。

眠りに入り、暗闇の中に鏡があり自分が写し出されていた。

鏡の向こうの私は無表情だ。

負けないと自分に言った。

鏡の向こうの自分の後ろには

逢つた事の無い人が私の肩に手を置いている。

私とその人は笑っている。

知らない人は

「私の子を宿るだろう…」と言つている。

私は瞬時に（鏡を割れろ）と聖なる魔法を唱えた。

鏡は崩れ落ちた。

一安心かと思つた…

その先を見ると、鏡の先にいた人が笑つてゐる。

その人は私に歩み寄つて來た。

私は近づかれたら危ないと感じ、エンジェル・プロテクション（守護神よ現れろ）と唱えた。

自分の周りに壁が出来たが、その人は片手で守護神を消し去つた。

そのお方は

「君は私の妻になるのだ。私と共に世界を変えよう…」

私は強く

「私は、貴方の妻になるつもりもありません。神に忠誠を誓つた天使です」

その方は笑顔で私に手を伸ばしてきた。

私は聖なる魔法の書で読んだ通りに（呪われた夢よ終われ）と唱えた。

すると私は目が覚めた。

横にはシンセ様が眠つてゐる。

起き上がり、溜め息をつきながら

「どうにか夢に勝てたのね…」と呟くと

目の前に、髪の長い魔女が現れた。

殺氣しか感じない。

魔女は（時よ止まれ）と唱えた瞬間

時間が止まつた様に全ての物が静かになつた。

魔女が近づいてくる。

私は家の外に逃げ、魔女に向かい

「何故、戦わなければならぬのでしょうか」と逃げ回った。

魔女は背後から蛇を出し、蛇が私に襲いかかってきた。

私は蛇に向かい（消しられ）と唱え、蛇は消えていった：

魔女は笑みを浮かべ

「一緒に来るのだ。お前の本当のファイアンセが待っている」

私は必死に

「ファイアンセはシンセ様です。他に居ません」

私と魔女の距離は近くなつたり、遠くなつたりしている。

魔女は笑みを浮かべながら

「シンセという者は、お主を本当に愛してはいない。お前の将来を  
買つた様な物だ…」

エンジェル・プロテクション（守護神よ現れろ）と魔法を出しながら  
「シンセ様は心から、私を愛して下さっています。決して、その様  
な考え方の方ではありません」

その時、魔女の横にシンセ様が現れた。

「シンセ様：？」一瞬、油断をしてしまった。

目の前に現れたシンセ様の目は、いつもの優しい眼つきでは無かつ  
た。

「お前の姿に、将来の素質を買つただけだ。お前が、ただの天使の  
姿なら見抜きもしない。拾われただけ幸運と想いなさい」

私は急いで、シンセ様の部屋に移動した。

そこにはシンセ様は寝ていなかつた：

空間の本を急いで開き、目に入る聖なる魔法を頭にいれた。  
外に移動すると、魔女とシンセ様が立つていて。

私は魔女に対し

「シンセ様をお返し下さい」

魔女は笑っている。

「お主はこの者に迷惑を掛け続けるであらう。その前にひきこもる事だ」

私は本で見た（時よ動け）と呟え、共に魔女に対し（静止せよ）と杖を向けた。

その魔女は聖なる魔法を受ける前に消え去った。  
シンセ様がその場に倒れてしまった。

私はすぐにシンセ様を抱き

「シンセ様？シンセ様？」と呼び続けた。  
家中から、ムドラ様が驚いて出てきた。  
シンセ様をベッドに運んでくれた。

つかの間の幸せ　夢の中で魔との戦い（後書き）

魔法の名前は作った方がいいのか悩んでいます。

私は一人の方が良い…（前書き）

シンセが魔に操られた事を  
シンセの父上<sup>ムドラー</sup>と話、二人の間に距離が…

私は一人の方が良い…

シンセ様は意識を戻したが、ムドラー様が寝ていなさいと話しました。

「私が今後、シンセ様のお嫁になつたら… 今回の様に、シンセ様に迷惑が掛かるのではないでしょうか」

ムドラー様は考へてゐる様子だった。

「狭間の戦いが終わるまで、一人は距離を置いたほうが良いかも知れぬ… その後に結婚するのもありだろう」

私はムドラー様に

「戦いで片方しか戻れないかもしれません。シンセ様は戦いが始まる前に、私にお子を産んで欲しいと申しておりました… それに、距離を置いた事で、相手の思つままになつてしまふのではないでしょうか？」

ムドラー様は

「お子も必要だが、今は戦いに専念する事だ。シンセには私から距離を置く事を伝えておく。シンセを愛してあるか？」

私は涙を流しながら

「心から愛しております」

ムドラー様は溜め息をつき

「アムエルの荷物は元の家に戻しておぐ、シンセに少しの別れを告げて来なさい。そしてカシエス殿の元に行き、修行を続けるのです」

私は無言で部屋に行くと、シンセ様は起きていた。

シンセ様は笑顔で出迎えてくれた。

「アムエル？ 涙を流して… 悲しい顔… どうしたのだ？」

私はシンセ様の横に座り

「シンセ様？ 私を強く抱きしめてくださいますか？」

シンセ様は私の涙を拭きながら

「何故、その様な事を言つのだ？ いつでも一緒にいるのだろう？」

シンセ様にキスをし、顔をそむけた。

涙が止まらない…

「詳しい話は、ムドラ様からお聞きください」

部屋を飛び出した。

池の辺に立つていると

昨日の魔女が現れ、蛇を出してきた。

「エンジェル・プロテクション」（守護神を現れる）  
ベビに向かい（消え去れ）と聖なる魔法を唱えた。  
辺りが光を放ち、他の天使が私を見ていた。

…私は一人の方が良い…

シンセ様に迷惑が掛かつてしまつ…

涙を流しながら、カシェース様の家に向かう

家に入ると、奥からカシェース様の声が聞こえた。

「いつもの飲み物を飲みなさい。疲れただろう…」

私はカシェース様に

「昨夜の事、知つておられたのですか？」

カシェース様は椅子に座り

「アムエルとシンセ殿が危なくなつたら、助けるつもりだったが、  
アムエルは良くやつた。短期間で使える聖なる魔法が増えていた。  
しかし、シンセ様も操られるとは…」  
カシェース様も考へ込んでいた。

私は涙を流しながら

「シンセ様には別れを告げてきました。私は一人の方が良いと思いま  
す。私にファインセが居るのは危険な事だと…」  
カシェース様は

「私の昔に似ておる。アムエル…我の後を継ぐ事になるかもしだい。それを考えておきなさい」

私は涙を流すしかなかつた。

カシェス様は何時もの様に怒り

「涙を流すくらいなら、聖なる魔法を覚えなさい。強くなるのです」と席をたつた。

愛する人を危険な目に合わせたくない（前書き）

アムエルはシンセに危険な目に合わせたくないと思  
い距離を置くことにした。

シンセは、それをうけいれなかた。

しかし、シンセと話をして…せめて自分の想いだけは取らないで下  
さいとお願いをする。

愛する人を危険な目に合わせたくない

その頃、シンセ様はムドラー様に私との話を聞いていた。

ムドラー様は静かに

「アムエルとは、距離を置くのだ。それか、アムエルに対しての愛を諦め、他にファイアンセを与える。今、アムエルにファイアンセが居る事は危険だ。魔はシンセにも手を出してきた。私はシンセの事が心配だ。弟子の様になつて欲しくない。アムエルも心配だが、二人を同時に失う事は考えたくない」

シンセ様はそのままカシェス様の家に来て、扉を叩く。

カシェス様が返事をすると、シンセ様が私に逢わせて下さい」と言つてている。

「アムエル…どうする? 話しをするか?」

私はカシェス様に

「昨日の起きた事をシンセ様に伝えて頂きますか? そして、シンセ様を、危険な事に巻き込みたくないとお伝え下さい」

カシェス様は外でシンセ様と話をしている。

カシェス様が戻り

「シンセ様に別れを告げて来るのだ」と、私に伝えた。私は恐る恐る外に出ると、シンセ様が涙を流していた。私も自然に涙が流れる…

「シンセ様…?」

シンセ様は一言

「愛しているか?」と聞いてきた。

私は偽りたくないと思い

「愛しています。しかし、シンセ様を危険な目に合わせる事は出来ません」

シンセ様は背を向いたまま

「何故だ？アムエルの為なら命を捨てても構わない」

私は怖かつた…

「シンセ様？狭間の戦いで逢いましょう。ムドラ様にも考えがあるのでしよう…私は危険過ぎるので。操られているシンセ様を見てられません」

シンセ様は「お子の約束は？」

「ムドラ様に話しをしたら、お子の約束は戦いの後でも構わないだろうと。私が戻れる保証もありません…仕方ないのです。ムドラ様にとつてシンセ様は大事なお方なのです。今はお互に修行に専念するしか無いのです。私はシンセ様の幸せを祈っています…ただ、私のシンセ様を想う気持ちは取らないでください」と言いカシェス様の家に戻った。

カシェス様は溜め息をつきながら

「アムエルは強くなつた…修行を始め、今は忘れるのです。どの本を読んでも構わない。今自分に出来る聖なる魔法ができる限り覚えなさい」

私はカシェス様に聞いた。

「昨日、現れた魔女を消し去るにはどうしたら良いですか？」

カシェス様は本を出し

「それは、聖なる魔法にはないのだ。魔が操る魔法には相手を死に落とす魔法はあるが…前にも言った通り、お主の力は紙一重である。魔の魔法を使つた時点で、お主は墮天使になるだろう。それをも覚悟出来るのなら、これを読んで覚えておきなさい。戦いの最後に必要かもしれません…だが、お主に我の後を継いで欲しいのだ」

## 大天使に昇格（前書き）

神に忠誠を誓い、命のあるもの全ての為に戦います…

愛していると言つたはずなのに

周りには、シンセを振つた最低な天使と言われる。

師匠カシェスの過去も知り、自分も一人で生きていく覚悟をする。

## 大天使に昇格

その時、カシエス様の家に神の使いが現れ

「アムエルを今から大天使に昇格させる儀式を行う。戦いから戻つてくる事が出来たら、カシエスの望み通り後を継げる事が出来るだろう。一人で神に来る様に」と去つていった。

私は驚き

「カシエス様？私が大天使に…？」

カシエス様は

「私の後ろを付いてきなさい」

家を出るとミルエルが来た。

カシエス様は

「今から出掛けてくるから、本を読んで修行していなさい」

森を出て、シンセ様の家の前を通る。

カシエス様はムドラー様に挨拶をして、耳元で何かを話している。

私は、シンセ様、ダグエル様、ルシフェル様、タニエル様、他の天使様に頭を下げる。ダグエル様が私に向かつてきただ。

私の顔を掴み、ダグエル様は私を睨みつける。

「シンセを振つたらしいな…最低な天使だ」と言い戻つていった。

私は涙しか出なかつた。

「離れるしか無かつたのです…」

ムドラー様が私の元に来て

「カシエス様から、話しさ聞いた。大天使になるのだな？」

私は頷き

「シンセ様には、素敵なフイアンセを…」と頭を下げ

カシエス様の後ろをついて神殿に向かつた。

前に居るカシエス様は

「シンセ殿を振ったのか？」

私は涙を流しながら

「そのつもりはありませんでした。危険な事に巻き込みたくないと言つただけです…ダグエル様には振った最低な天使だと言われました」

カシェス様は小声で

「私も若い頃に、フィアンセが居たが。同じ様に危険な事に巻き込みたくなかつた。今でもその者を愛してある。その者は幸せな家庭を築いた。始めは悲しむ事しか出来なかつたのじや…」

神殿に着くと、扉が自然に開いた。

カシェス様は私を扉の前に立たせ

「奥に進むのです…」

私は奥に進んで行つた。

何処からか「座りなさい」と聞こえてきた。

空の声は何処に居るのか分からぬ

「お主は数日、戦いを行なつてゐる。天使のままでは力が發揮出来ないであろう。お主は選ばれし天使であり、大天使になり、その後も期待されるであろう。お主は何の為に戦うのか？」

私は戸惑う事なく

「神に忠誠を誓い、命のあるもの全ての為に戦います」

空の声は

「普通の天使とは、過酷な事が多いが耐えられるか？」

私はこれが使命なのだと感じ

「はい。何事も受け入れます」

空の声は

「宜しい。お主を大天使に昇格させよう。お主の力を最大限に發揮させるのだ」

「はい…」

すると、私の周りに黄金の光が放ち

私の頭にはティアラが現れ、黄金の腕輪が両手に現れた。羽は完全にピンクに染まり、正装もピンクに染まった。

空の声は

「お主の杖は、既に手の中に入っている。手を使えば、聖なる魔法を使えるだろう。頑張りなさい」

光が消え、後ろからカシエス様が現れた。

「帰りますぞ」

神殿を出る。

歩いていると天使の人達は、私に頭を下げている。

カシエス様は歩きながら

「気にならないで歩くのだ。普通の天使は色の染まつた大天使を中々見ることが出来ないから、頭を下げているだけだ」

私は、神殿の空の声が気になり

「カシエス様？ 神殿の空の声はどなたの声なのですか……？」

カシエス様は迷うことなく

「神だ」

私は驚いた……

## 強いよつや弱い気持ち（前書き）

大天使に昇格をして、シンセの家の近くを通ると  
仲間のルシフェルとタニエルに、シンセを振ったのか？と聞かれる  
危険な目に合わせたくなかつた。  
泣くしかなかつた。

師匠とシンセの父親は愛し合つて一人をどうすれば良いのか話をする  
アムエルもシンセも知らない事を師匠はシンセの父親に話をする

## 強いよりで弱い気持ち

シンセ様の家の前で、沢山の天使様が修行をしている。  
目でシンセ様を探してしまう…

ムドラー様が走ってきて、抱きしめてくれた。

「アムエル！よく大天使になつた。修行をして、沢山の物を自分に  
取り込むのじや」

沢山の天使様は私を見ている…

ルシフェル様が走ってきた

「フィアンセを振ったのは本当か？！」

私は顔を横に振り

「危険な目に合せたくなかつただけです…どうしたら良いのでしょ  
うか…」

ルシフェル様は頭を撫でてくれた。

タニエル様も来て

「本当に強い様で、弱い愛子だな」と笑つている。

私は涙を流すのを我慢して、頷いた。

ダグエル様が来て、ルシフェル様とタニエル様に

「アムエルはシンセを利用しただけです」と言い放つた。

私はダグエル様に

「自分の力の責任で、愛する人が苦しむ姿を見ていられますか？！  
この苦しみが、分かると言うのですか？愛する人と一緒に居られな  
い苦しみが分かるというのですか？！」

叫ぶと、凄い竜巻が私の周りに起きた。

カシェス様が

「アムエル！落ちつきなさい。気持ちを抑えるのです」

カシェス様の声が聞こえ、我に返る。

「ダグエル様はミルエルを愛したら良いのです。許されるのですから！私は誰かに愛される事が許されないので……一度とその様な言葉を聞きたくありません！」

ルシフエル様とタニエル様に挨拶をして

私は先にカシェス様の家に戻った。

ルシフエル様は

「愛する人と一緒に居たいのにいられない…可哀想に」

タニエル様は

「それを、振ったなど言われるなんて…俺なら耐えられない。力があるだけで引き剥がされる。神はなにを考えているのだ」

ダグエルは無言だった。

ムドラ様はカシェス様に

「愛し合つ一人を、どうしたら良いのか？」と聞いている。

カシェス様は

「既に、アムエルのお腹にはシンセ殿とのお子が宿つてある。二人は何も知らぬ。私がムドラ殿にフイアンセが来た事で諦めがついたが、アムエルには既にお子が…シンセ殿には知らせずにフイアンセを与えるのも良いかもしだれぬ。お子は母一人でも育てられます…その子は私の元で育てますので」

ムドラ様は驚き

「なんと不幸な二人だ…」と嘆いている。

カシェス様の家に入ると、ミルエルが修行をしていた。

私の姿を見て驚いている

「アムエル…その姿はどうしたの？」

私は涙を流しながら

「…大天使になつたの。今日は誰とも話したくないわ」

カシエス様の本の棚にある書物を端から読み始めた。

ミルエルは首を傾げ

「私にも話せない話し?」

私は涙をこらえながら

「ミルエルも聞いたのでしょうか? 私がシンセ様を振ったと言つ話を…」

ミルエルは言いにくそうに

「ダグ様があつしゃつしていましたわ…」

私はミルエルに向かい

「そのゴシップを皆が信じています。いつ…私が愛する人を振ったのですか? 愛しているとお伝えしたのに…仲間を信じる事が出来ない天使など…まさか、シンセ様もそう思つておられるのですかね…」

ミルエルは言いにくそうに

「ダグ様が、シンセ様にアムエルを忘れる伝えたみたい…」

私は力が抜け、その場に座りこんでしまった。

「ミルエル? 何故、皆は私とシンセ様を引き剥がせようとするのですか?」

ミルエルは私を抱きしめてくれた。

「私は何時までも仲間だから…」

私は辛かつた…

「ミルエル有難う…」

## 親友の幸せ シンセの悲しい気持ち（前書き）

自分はシンセ様に危険な目に合わせたくない。と離れた  
しかし、親友のミルエルは明日、結婚式をすると言つ  
シンセも同じように落ち込んでいた。

## 親友の幸せ シンセの悲しい気持ち

ミルエルは喜びながら、話し出した。

「明日、ダグ様と結婚式なの。来てくれる?」

私は驚きながら、下を向く：

「私が行つたら、なおさらダグ様が怒るじゃないのかしら?」

ミルエルは

「今から、ダグ様に聞いてくるわ」と家を飛び出して行つた。  
その間に、カシェス様が朝教えてくれた魔の書を読む。  
戦いで誰かを助ける事が出来るかもしれない…  
私が墮天使になつたとしても、愛する人達が帰れるなら。  
頭にどんどん入つてくる。

前とは全く違う…。

これが力なのだろうか…

今なら事務局で貰つた本を頭に入れる事が出来る。

私は急いで事務局の本を読み始めた。

どんどん読む。

面白い…

その時、笑顔のミルエルが戻り

「アムエルも来て良いって!」

私は振り返り

「じゃ、行かせて貰うわ」と笑顔になった。

私は心の中で

「シンセ様…愛しています。せめて私の想いだけは取らないでください…」

私はおもむろに聞いた

「ミルエル? 修行場にはシンセ様はいらっしゃった?」

ミルエルは笑顔で

「ダグ様と一緒に話しゃをしていたよ？」

溜め息をついて

「そう…」

ミルエルは笑いながら

「あの二人は幼馴染だもん。仲良いよ？」

私は思わず

「だから、ダグ様はあんなに文句を言つのね…仲間を想つての事だから受け入れるしかないわね…」

ミルエルは首を傾げて

「ダグ様に、何か言われたの？」

「何も言われてないわ」と微笑む。

シンセは落ち込んでいた。

シンセはダグエルに

「アムエルに俺を振つたと、言つたのか？」

ダグエルは言いにくそうに

「勢いで言つてしまつた…」

シンセは

「俺は振られてなんかいない。父上に言われて、修行の間だけ距離を置いているだけだ…あんまり、アムエルに言わないでくれ。アムエルが一番辛いはずだ…」

ダグエルは

「さつき、アムエルに怒られた。愛する人と一緒に居られない気持ちが分かるのかと、自分の周りに竜巻を作る程…俺はミルエルと普通に一緒に居られて幸せだ。アムエルは選ばれた天使なのは分かつていた。自分の力で愛する者を巻き込む辛さなんか理解を超えてい るよ。明日の結婚式に来てくれるだろ？」

シンセは

「仲間の結婚式だ。行かない訳がないだろ？」と作り笑顔をしていた。

カシエス様が家に戻り

「アムエル…どれ位の聖なる魔法を覚えられたか？」

私は指をさし「この棚と事務局で貰つた本です」

カシエス様は頷きながら

「夢の中の戦いで使いなさい。但し、朝言つた本は使うのではない。狭間の戦いで、本当に使わなければならぬ程の選択を迫られたらの話しだからな？分かつておるの？」

「…はい」

ミルエルが

「夢つて何？」

カシエス様は

「アムエルは毎晩、夢の中で魔に襲われて戦つてゐる。昨日はシンセ様まで操られてしまつた。だから、家を出たのだ。ミルエルも覚悟をしていなさい。自分の力がついてきたら、愛する者と離れなければならないという覚悟を」

ミニエルは笑顔で

「私とダグ様は明日、結婚しますよ？」

カシエス様は驚き

「結婚？！これから戦いに出るのに結婚するのか？！」

ミルエルは笑顔で頷いていた。

私は苦笑いで

「カシエス様？結婚しても良いのじゃありませんか？愛する者同士結婚出来るのは良い事ですよ…」

カシエス様は私に

「シンセ様と結婚の誓いはしたのか？」

私は笑顔で

「誓いはしましたよ？」

カシエス様は

「若い娘は…何を考えているのか分からぬ」

ミルエルは

「カシエス様も、明日の結婚式に来てくださいね！」と笑っている。

カシエス様は呆れて

「今日は一人共、帰りなさい」と追い出されてしまった。

私とミルエルと花畠で会話をしていた。

私は結婚式に興味があり

「式で何を着るの？」

ミルエルは照れ笑いをしながら

「ダグ様の母上がドレスを作つて下さったの…凄く綺麗なのよ…」

私も笑顔になり

「良いね…ドレス。お子は？」

ミルエルは完全に舞い上がっている

「まだだわ！これから戦いに行くのに…欲しいけどね」と顔を押されて微笑んでいる。

すると、ダグ様とシンセ様が薔薇を見て話しをしている。

ミルエルは笑顔になり

「ダグ様！」と走つて行つた。

シンセ様を見ると、悲しい顔をしていた…。

私は立ち上がり、シンセ様のもとに行こうとした  
でも、また巻き込んでしまう…

涙が自然に流れてくる…

私はシンセ様の笑顔が見たい。

でも、巻き込んではいけない…  
足が進まない…

親友の幸せ シンセの悲しい気持ち（後書き）

空氣の読めない親友のミルエル。  
でも、暗いイメージよりまだましかな…と思いました

## 自分達とは裏腹な運命（前書き）

薔薇園でシンセに再会をする。

シンセはアムエルに△家に戻つて来てくれとお願いをする。  
しかし、シンセの父親△ドラとの約束があると話をする。

抱き合つていていたりを、シンセの父親に見られてしまい  
戦いの為にシンセには、新しいファインセを  
アムエルはすでにシンセのお子が宿つている真実をしる。

## 自分達とは裏腹な運命

私は自分の家に戻る。花畠から去りうとした時、後ろから「アムエル！」と声を掛けられた：

「花畠から去りうとした時、後ろから「アムエル！」と声を掛けられた：

「花畠から去りうとした時、後ろから「アムエル！」と声を掛けられた：

「花畠から去りうとした時、後ろから「アムエル！」と声を掛けられた：

私は大きな声で

「シンセ様！ それ以上、近づいてはなりません。また巻き込んでしまいます…」

シンセ様は悲しい顔をしている

「近づかなくとも、お互に愛していたら変わらないのではないか？」

私は座り込んでしまった。

「愛する想いも無くさなければならぬのですか…？」

私は涙が止まらない…

シンセ様は走つて来られた。

「アムエル？ 何故、愛する事を無くさないといけないのか？」

シンセ様は私を強く抱きしめて下さつた。

「どんな試練があるうとも、アムエルと居たい気持ちは変わらぬ。今もこれからも愛するのはアムエルだけだ」

私はムドラー様との約束を思い出した。

「しかし、ムドラー様とは…シンセ様と距離を置くお約束をしています…それが運命なのです」

シンセ様が涙を流している…

「父上には話をする。家に戻つててくれぬか？ 一人は辛いのだ。隣にアムエルが居ないと眠れない」

私は嬉しくなり

「シンセ様のお気持ちだけで幸せです…胸がドキドキします」

そこに、ムドラー様が現れた。

「二人共、来なさい」

ムドラー様に連れられ、書斎で話しこそする。

「アムエル？ シンセと距離を置く話しをしたのを忘れたのか？」

顔を上げられず

「忘れておりません……」

ムドラー様は私達に背を向けて話をする。

「何故、二人は抱き合つて居たのか？」

シンセ様が

「アムエルは、近づかない方が良いと言つたのですが……私がアムエルを抱きしめました」

ムドラー様は溜め息をつき

「一人はどうしたら良いのだろうか……」

シンセ様は私の手を握ってくれた。

「二人で試練を乗り越えます。ですから、一緒に居させてもうえませんか？」

ムドラー様は

「それは、毎晩アムエルが魔と戦う時に、シンセが操られる事もあるのだぞ？ もし、戦いの前にどちらにも危険な目に会つたらどうする？ アムエルは必ずシンセを守る為に自分を犠牲になる事を選ぶだろ？ それでも良いのか？」

私は頭を下げ

「自分自身もシンセ様も守ります。どうかシンセ様の傍に居させて下さいませんか……？」

ムドラー様は

「愛し合う一人を引き剥がすのは苦だが……戦いの為なのだ。アムエルの今後もシンセの今後も期待されておる。どちらを失つても悲しい。シンセ？ お前には新しいファインセを与える。新しいファインセの為に戦いなさい」

私はシンセ様から手を離し、立ち上がり書斎から出よつとした。

ムドラ様は私に

「アムエル？カシェス殿から話しさ聞いたが、もう既にシンセのお子は宿つているらしい。お子は母一人でも育てられるだろ？。その子の為に戦うのじや」

私はお腹を触り

「シンセ様に新しいフィアンセ…それは、私の力の責任です。しかし、私のお腹にはシンセ様のお子が宿つてているのですね…お子は父上を知らずに育つのですか？それほど悲しい事はあるのでしょうか？お子が父上を知った時に、シンセ様がフィアンセの方との間のお子と遊んでいる…そんな姿を見たら、どんなに悲しい事か」

私はシンセ様の家を飛び出した。

涙が止まらない…行くあても無く歩いているトルシフェル様が居た。私はトルシフェル様を無視して繁華街を超えて街の外れまで来てしまつた。

## 仲間の優しさ シンセの強い気持ち

座り込んで泣いていると…

ルシフエル様が後ろから声を掛けてくれた。

「アムエル…どうした？」

私は振り向いて

「ルシフエル様？自分の力があるだけで、一生一人で居ないといけないのです…なのに、シンセ様のお子を宿しているのです…シンセ様の父上には、母親一人でもお子を育てられると言われました」ルシフエル様は私の横に座り頭を撫でてくれた。

「シンセ様はなんと言つていたのか？」

私は涙が止まらず、ルシフエル様に抱きついた。

「シンセ様は一緒に居られる様に父上に言つて下さると。横に私が居ないと眠れないと…でも、シンセ様の父上は新しいフィアンセを…」

ルシフエル様は

「泣きたいだけ泣きなさい」

夜空が綺麗だつた

私が飛び出した後も話は続いていた。

シンセ様はムドラー様に

「アムエルと結婚出来ないのであれば、私は誰とも結婚する気はありません。父上に背く事になりますが、家を出ます」

ムドラー様は

「二人の覚悟は強いのだな？」

シンセ様は探しに外に出ようとした。

ムドラー様は

「戦いが終わるまでは、別々に暮らしなさい。何が起きるか分からぬ。その後に結婚をしなさい」

シンセ様は

「別々に暮らす事を条件に、結婚を直ぐに行つ」とは駄目ですか?」

ムドラー様は驚き

「結婚をしたら、別々に暮らす意味が無くなるだろ?」

シンセ様は

「アムエルを探しに行きます」

シンセ様は探し回っていた。

私は夜空を見ながら、ルシフェル様に

「人間界でもう少し一緒に居られたら、楽しかったな…」

ルシフェル様は笑っていた。

「せめて、卒業までは一緒に居たかったな」

私は少し幸せになり

「ルシフェル様のそのお言葉を聞けて嬉しいです!学校生活は楽しかったです。それにルシフェル様に惚れてましたし!」

ルシフェル様は笑いながら、私の頭を叩いた

「そろそろ、自分の家に帰りますね。ルシフェル様も奥様がお待ちじゃないですか…?」

ルシフェル様と別れて、自分の家に向かう。

## シンセのプロポーズ

繁華街を越えて街に戻ってきた。

やつぱ一人じやなきや駄目なのですね…

シンセ様の家も通り越えて、薔薇園の中を歩く

「薔薇はいつも綺麗に咲いている…生きている全ての為に…」

すると、突然後ろから抱きしめられた。

「誰?！」

暗くて誰だかわからない。

その人は私を強く抱きしめている。

「どれだけ探したか…」

驚いて

「シンセ様…？駄目です。新しいフィアンセの方とお幸せになつてください」

シンセ様は

「父上には話をしたから、戻つてきてくれないか？」

私は戸惑いながら

「ムドラー様は、私を受け入れてくれないので…？」

「アムエル？私を見なさい…」

私は顔を上げられず、シンセ様の方を向いた。

シンセ様は私の両手を掴んで

「アムエル？私の目を見なさい」

いつもの優しいシンセ様の声じやない

私は恐る恐る顔をあげる

シンセ様は涙を流していた。

「シンセ様…？」

私の髪の毛を触り…

「アムエル？私はアムエルとお子の事しか愛せない。これから一緒にいるのも、アムエルしか考えられない。不器用な私を受け入れてくれぬか？」

薄暗い薔薇園の中には私とシンセ様しか居ない。

「こんな危険な私を想つてくださるのですか？」

シンセ様は

「不器用な私と結婚してくれ」と私の唇にキスをした。  
私はシンセ様の優しさが心に染みる…

シンセ様は私を無言で家に連れて帰り

ムドラー様の前に立ち

ムドラー様は

「見つけたか…結婚をして一緒に暮らしなさい。試練がどのくらい辛いのか分かるだろ？」「う

私はシンセ様を横目に

「ムドラー様…？私がシンセ様のお嫁に来ても宜しいのでしょうか？」

ムドラー様は

「大天使が嫁に…シンセには勿体ないのだよ。勿論歓迎だ」

シンセ様の母上は

「結婚が決まったのなら、ドレスを作らなことね？」と喜んでいる。

シンセ様と2人で廊下を歩きながら

「アムエルが笑顔じゃない…」

「心からシンセ様を守りたかったのです…」

シンセ様は

「気持ちだけで十分だよ。アムエルの為なら命を墮としても構わない」

シンセ様の手を握り

「そんな事、言わないで下さいますか?ずっと一緒に暮らしたいのです」

シンセ様は笑顔になり

「本当にこれからは一緒になるつ。だから、気を使わなくて良い。それに、お子が宿っているのか…幸せだ」

私はシンセ様にしがみつき

「私も知りませんでした。お腹のお子の為にも修行しないといけませんね…明日は、ダグ様とミルエルの結婚式ですね。シンセ様も行かれますか?」

「勿論、幼馴染の結婚式だ。行かないわけがないだろ?アムエルも行くのだろ?一人で出席しよう」と頭を撫でられた。

私も笑顔が戻り

「綺麗なドレスを来ていかないといけませんね」

シンセ様の母上が来て

「アムエル?シンセのお子を宿しているの?」

笑顔で頷くと

「祝いをしないといけないわね。どっちに似るのかしら?女の子か男の子か…待ちきれないわ。アムエルのドレスも作らないといけないのに!」と嬉しそうに去つていった。

私たちは笑いながら

「愛が形になる…凄い事です。私も母になるのですね」

シンセ様は

「父か…アムエルの子供だから、力もありそうだ。幸運の天使だからな」と笑う。

「あ…でも、私の荷物は元の家に戻っていますよね?今日は別々ですね」

シンセ様は首を傾げ

「持つていこうとしたから、止めさせたからそのままだよ?」

笑顔でシンセ様に抱きついた。

## アムエルとした父親の想い & 結婚式の前祝い（前書き）

アムエルとシンセを引き剥がそうとしたマドラは後悔をし、昔の事を思い出す。

アムエルとシンセはミルエルとダグエルの結婚前祝いを祝に行く。

## 「おめでたとした父親の想い & 結婚式の前祝い

ムドラー様はシンセ様の母に話しかけていた。

「あんなに、愛し合つて一人を引き剥がそうとした…」

シンセの母は

「ムドラー様にフィアンセが居た時に、同じ事を思いましたよ？今まで、カシェス様はムドラー様を想つていらつしゃるのかかもしれませんね…自分の力で危険な事に巻き込みたくない。そう思つたのでしよう」

ムドラー様は溜め息をつき

「そう言われれば、同じ台詞を言われた。私は鈍感だったのだな」

シンセの母は

「一人の絆は強いです。簡単に引き剥がせないのですよ。それに、昔と今は考えが違うのかもしれませんよ」と笑う。

「お子か…孫だな」とムドラー様は笑う。

シンセの母は

「お祝いをしないと！何事も狭間の戦いの前に終わらせておかないと…」

ムドラー様は

「今回の戦いには我也行く。良いな？」

シンセの母は驚き

「主天使をまとめるムドラー様が行くのは、駄目ですか」

ムドラー様は考えていた。

私とシンセ様は、明日の結婚式に着ていくドレスを選んでいた。

シンセ様は楽しそうに

「羽がピンクだから選びにくいな」

私も楽しい

「紫は？」と笑顔で見せる。

シンセ様は納得行かないらしい。

「大天使様がドレス…」と笑っている。

急に恥ずかしくなり

「大天使様なんて言わないでくださいますか？せめて奥様と、ミルエルにドレスの色を聞いてきます！ドレスの色も被らないですからね！」

シンセ様は

「2人で前祝いに挨拶行こうか？」と二人でダグ様の家に向かつた。

ダグ様とミルエルは家の前で座つて話をしていた。

私達に気付いた様子で、ミルエルが私に抱きついてきた。

「結婚の前祝いに来たよ！」

私とミルエルは2人ではしゃいでいた。

シンセ様はダグ様と話しをしている。

ミルエルをダグ様の元に連れて行き

「二人に前祝いです」と（雪よ降れ）と唱え、輝いた雪を降らせた。

ミルエルは凄く喜んでいた。

私は笑顔で

「幸せな状況じゃないと、この雪は輝かないの。ミルエルが幸せだからだよ」とミルエルに抱きつく。

シンセ様も笑つていた。

ダグ様は私に何か言いたそうだった。

「アムエル…色々、すまなかつた。昇格おめでとう」

私はダグ様に頭を下げ

「有難うござります。それに、ダグ様は悪くないですから…ミルエルを幸せにしてあげてくださいますか？」と笑顔で話す。

笑いながら、ダグ様の耳元で囁く

「お子はまだですか？」

シンセ様にダグ様が

「アムエルが変な事を言つ」と笑つている。

私は（雪よ止まれ）と囁え

シンセ様がダグ様に

「何を言われたのだ？」と話しをしている。

それを聞いたシンセ様は笑っていた。

「父上が祖父になる事になつた」と笑っている。

私とシンセ様は笑つてゐるけど

ダグ様とエミエルは首を傾げてゐる。

私とシンセ様が

「お子が出来た」と言つと、ダグ様とミルエルが驚いていた。

ミルエルは私に抱きつき、おめでとうと喜んでゐる

「アムエルのお子は私のお子だわ！」

ダグ様はミルエルを見て笑つてゐる。

「ミルエルもお子が欲しいのか？」

ミルエルは恥ずかしがつてゐた。

## アムエルを迎えた魔女

四人で楽しく話していると、女人人が現れた。  
それは蛇を出す魔女だ。

私は急いで三人をダグ様の家にいれた。  
魔女は微笑みながら

「大天使になつたのね…」

私も微笑みながら

「それが、何か？」

魔女は

「あなたの本当の旦那様がお待ちなの…」

私は魔女に聞いた

「あなたは何処から來た人ですか？」

魔女はおもむろに「…魔界だ」

私は魔女の目を見つめ

「魔界人が天空に…誰かが手を結んで居るのですね？」

魔女は笑みを浮かべている。

私は強気でないと負けると思い

「まだ夜中ではないのに…天空に來るなんて勇氣がある魔女さんですね」

魔女は私に歩み寄りながら

「私がいつ來ても良いようにしていいと、危ないですわよ？」

魔女が急に縛れと唱えた

私は片手でエンジェル・プロテクションと唱え

魔女の杖を指さして、武器よ去れと唱えた。

魔女の杖は、魔女の手から落ちた。

今だと思い、縛れと魔女を縛つた。

武器よ来いと武器を取り上げると

カシェス様が慌てて來た。

カシエス様は知らない聖なる魔法を唱え  
砂に変えて小瓶に吸い込ませた。

私はカシエス様に

「カシエス様？魔界人は簡単に天空に来られるのですか？」

カシエス様は

「誰かが魔界と手を結んでいるかもしけぬ……これを神殿に出していく  
から、お主は何を言われた？」

私は言われたままに

「魔界から来た魔女で、私の本当の旦那様が待つていると……」

カシエス様は

「そうか……」と溜め息をついて、神殿に向かつて行つた。

カシエス様がいなくなると、三人が家から出てきた。  
ミルエルが私に抱きついて來た。

「実践怖いよ……」

シンセ様とダグ様は

「カシエス様が作つた物なのか……」

私は首を傾げ

「いや？魔界から来た魔女よ。シンセ様を操つた魔女だわ」

ミルエルは驚いて

「え？！夢とかの話しひ？！」

私は頷く

「夜中になる前に現れるなんて……」

ミルエルは怖そうに

「私一人だったら……何も出来ないわ

私はミルエルを見て首を傾げる

「なんで？ミルエル人間界に行つてから、少し気が弱くなつた？」  
と笑う。

ミルエルは

「人間が多いのより怖いわ。アムエルは人間界に行つて強くなつたのかしら？」

私はミルエルの肩を掴み

「ミルエル？ 愛するものの為になら、戦えるでしょ？ 私たちは剣術ではないの。6色に輝く指輪が味方してくれているわ」

ミルエルは首を傾げ

「愛するものの為？」

私は頷きながら

「旦那様もそうだけど、生きている全ての為に…」と笑顔で話す。

ダグ様は

「そんな危ない事をミルエルにさせたくない」と言つてはいる。

シンセ様は私を見て

「選ばれたのだ…させたくない事も出来るだろ？ アムエルは向こうからやつてくる。嫌でも戦わなければならぬ。夫婦として、お互いの使命を応援しなければ…どんな試練があるうとも」  
シンセ様がおもむろに抱きしめてくれた。

カシェス様が私達の所に戻り

「神殿で魔女を裁くそうだ。ミルエル…そんな弱氣でどうする？！ 神に忠誠を誓えないのか？ 誓えないなら、修行に来なくて良い。戦いに出た所で墮天使になつてしまふ。結婚式も氣をつける様に。アムエル？ 私が唱えた言葉は安易に使うのではない。朝、話した本の中に入つてはいる。紙一重で墮天使だ。結婚式で何が起きるかわからぬ、天使の正装で行きなさい。ミルエルを守るのです」と、森の中で消えて行つた。

ミルエルは

「カシェス様は来られないのですね…」

私は悲しくなり

「カシェス様は、結婚式がお好きじやないのでしょう。昔、自分の

力の為にフィアンセとの結婚を諦めたとおっしゃっていたから…辛いのでしきう」

シンセ様に

「シンセ様…？考えたら、私達の結婚式は危ない気がします…魔女が、私の本当の旦那様は魔界で待つていてると言つていきました。そんな魔界人が結婚式を邪魔しないはずがないと」

シンセ様は笑いながら

「今は考えなくて良い。明日は一人の結婚式だ」

ミルエルは悲しい顔をしている。

私は結婚式が羨ましく思い

「ミルエル？結婚式前日の花嫁がそんな悲しい顔をしているなんて…笑いが止まらない聖なる魔法でもいるの？」

顔を覗くとミルエルは笑つた。

「結婚式を楽しまないと！人間界でみんなにダグ様を想つていたのに…色々な呴きをダグ様に伝えたいわ」

ミルエルは顔を染めて

「恥ずかしいわ」と顔を押さえている。

ダグ様は私に

「何を言つていたのだ？」と聞いてきた。

私が笑顔でミルエルのダグ様に対する呴きを言おうとするが、ミルエルが追っかけて来た。

2人で楽しく騒ぐ。

「ほら、元気になつた！」

ミルエルは怒りながら

「アムエルの事も言つわよ！？」

私は面白くて

「シンセ様が何で、フィアンセにしてくれたのかしら？…くらいしか言つてないわ！」と逃げる。

ミルエルは笑いながら

「アムエル、するい！」と笑顔が戻っていた。

ダグ様は私達を見つめながら、顔が曇っていた。

シンセ様はそれに気付いて

「ダグエル？」

ダグ様は溜め息について

「夫として妻と戦場に一緒にいくのに、背中を押してやれないなんて…夫らしくないな」

シンセ様は

「これからがあるのでは？」

ダグ様はシンセ様に

「シンセはどうして平氣でいられる？」

シンセ様は笑顔で

「初めて一緒に寝た日に神に忠誠を誓い、お互いに忠誠を誓った。戦いでどちらかが帰れなくとも、それまでは愛を深めようって話した。一人で誓わず2人で誓えば怖くないだろ？明日、結婚式で誓えば良いじゃないのか？」

ダグ様は頷いていた。

## りぶらぶ～シンセの嫉妬心～

シンセ様が私を抱まえて

「そろそろ戻らないと。結婚式前夜の一人の邪魔は出来ないよ」と笑っている。

「明日、楽しみにしているわ」と話し、家に帰る。

帰りながら話をする。

「ダグ様はミルエルにプロポーズしたのですかね？」

シンセ様は考えながら

「ダグエルの性格上…していないと思つ。結婚するとだけしか言ってないだろう」

私は笑顔で

「私は、シンセ様が薔薇園で…」と首を傾げる。

楽しくて話をする

「シンセ様は…長髪に優しい眼差しに、優しい笑顔。心の広くて優しい方です」

シンセ様は首を傾げ

「そんなんに良く見えるのか？」と恥ずかしそうにしている。

シンセ様の顔を見て

「照れている所も素敵です」

頭を撫でられた。

「頭を撫でるのも好きですね」とまた笑う

シンセ様は

「アムエルを見ていると撫でたくなる。構いたくもなる。花畠の居場所取られてから、よく見ていて、いつ話し掛けようか悩んでいたのだよ？たまに居眠りしているから可愛くて…何度も抱きつこうかと思つた事か」と手を握られ、笑顔のシンセ様。

家の前に着き、月を見ながら話しかけていた。

私も結婚式前夜の花嫁の様に幸せになり

「シンセ様はダグ様に比べたら、嫉妬心は少しですね」と顔を伺う。

シンセ様は

「少しだと思うのか?」と勿体ぶつている。

「ダグ様の半分くらい?」と聞いてみた。

シンセ様は考えながら

「多分、ダグエルと同じかそれ以上かもしない…」

私は思い出して

「あ、私とミルエルが偵察学で…人間に殴られた時に助けてくれました?」

シンセ様は

「あれは、ダグエルと人間になつて後を追つていたのだよ。ミルエルが殴られていたら、あれじゃ済まなかつただろうね。アムエルはミルエルをしつかり守つていたな。思わず蹴り飛ばしてしまつたけどね…やっぱり分かつたのか」

頭を撫でながら笑つている。

「助けてくれた後に、頭撫でてくれてリングを笑顔で見ていたので。それに笑顔がシンセ様でした!」

シンセ様は首を傾げ

「気付いたのはそれだけ?」

私は驚いて

「それ以外に…何処に居たのですか?恥ずかしい」

シンセ様は私の目を見て

「毎日…見に行つていた。毎晩、シンセ様つて呟いていたのも聞いていたのだよ?寝るのを見て寝顔にキスをしていた」

私は恥ずかしくなり

「毎日?…しかも呟きまで聞かれていたなんて…」

頭を抱えてしまつた。

シンセ様は私の顔を覗き込んで  
「どうしたの？」と伺っている。

私はダグ様を思い出し

「シンセ様？ダグ様もミルエルを見に来ていたのですか？」

シンセ様は真剣に考えて

「ダグエルは…私より少ないな」

私は心を見られているくらい恥ずかしくなり

「シンセ様…来ているなら姿を現してくれないと…女の子は恥ずかしいですわ」と腕を組むと

真面目に返事をする

「そんなに恥ずかしいのか？」

私は呆れて

「シャワーを覗かれているくらい恥ずかしいですわ」

シンセ様は笑いながら

「今夜から一緒に入るか？」

笑顔で笑ってしまった。

## マドリ様の過去（前書き）

マドリ自身、シンセとアマーハルの強い絆と深い過去を強いて出し切ない気持ちになる

## ムドラー様の過去

家に入ると、ムドラー様が  
「アムエル？ 明日の朝一に、カシエス殿にこの手紙を渡してくれる  
か？」

私は驚き

「急ぎなら、今からでも構いませんよ？」

ムドラー様は不自然に

「私用だから、明日で構わん… アムエルから教わる事が沢山ある  
と窓から夜空を眺めていた。

私は首を傾げ、紅茶を煎れにキッチンに行く。

ムドラー様に

「アムエル？ 2人で話し出来るか？」

シンセ様が

「私もアムエルの傍に居て良いですか…？」と聞いている。

ムドラー様は何も言わず書斎に移動した。

紅茶を差し出しながら

「ムドラー様？ お話とは…？」

向かいの席に座り、シンセ様は本を選んでいる。

ムドラー様はおもむろに話しだした。

「シンセが居るから、話しつくいが… シンセの母の前にフィアンセ  
が居たのだ。その者は… アムエルと同じ様に将来期待された天使だ  
った」

私はおもむろに

「その方を愛していたのですか？」

ムドラー様は窓の外を見ながら

「心底、愛していた」

私は悲しくなり

「何故…愛していたのに?」

ムドラ様は私を見て

「その者の力で、シンセの様に私も操られたのだ。結婚も近づいていて…一緒に暮らしていた。しかし、父上と何かを話して、その者は家を出て行ってしまった」

さつきの気持ちが被り

「悲しく無かつたのですか?」

ムドラ様は

「勿論、愛していたから…すぐに、その者の修行をする所に逢いに行つた。その者の師匠は、愛しているならその者と離れなさいと。その後にその者と話しこしたが、自分と一緒に居ると私まで巻き込んでしまうから一緒に居られないこと。私は一言、愛しているか?と聞いたのだ…」

シンセ様と同じだ…

「その方は…ムドラ様に何をおっしゃったのですか?覚えている言葉をそのまま教えて貰えますか?」

ムドラ様は外を眺め

「心の底から愛しています。ムドラ様は新しいフィアンセの方をと父上様が話しこしました。そのフィアンセの方を心から愛してください。ただ、私のムドラ様への想いだけは消させないで下さい…とムドラ様は溜め息をついている。

「ムドラ様は、すぐに諦められたのですか?」

ムドラ様は私を見つめ

「いや、その者がいつも居る所に通つたのだ。その者は涙をずっと流していた。しかし、私は父上から新しいフィアンセを紹介された身だった。遠くから見つめる事しか出来なかつた。その後、私はその者に対する気持ちを隠しながら結婚をした。シンセも産まれて素直に嫁を愛した。その者とは職務上、逢つてはいたが、過去の

事だと思い…もう忘れていた。その者の師匠が戦いに行く際に、その者が私のお子を産んでいた事を聞かされ、師匠は戦いから帰つて来なかつた

私は涙が流れてしまい

「その方のお子には逢えたのですか?」

ムドラー様は

「その者に急いで聞きに行つたが、師匠が育ての親に預けた。とか教えてくれなかつた。その者もお子が何処に居るのかわからぬのだろう…」

私もその方のようになつていていたのかもしれない…

「その方は、今何を為さつているのですか?」

ムドラー様はシンセ様を眺めながら

「その者は結婚もせずにいた。結婚の話しさ噂で聞いていたが、その者は断り続けていた。結婚すれば、私も嬉しかつたのだが…今も一人だ」

私は自分の想いと重ねてしまい

「その方は…今でも、ムドラー様を想い続けているのかも知れないとすね」

沈黙が流れた。

すると、ムドラー様は立ち上がり

「シンセとアムエルを見て父上の様にすれば、上手く行くと想つていたが…それが、当たり前だと思つたのだ。だが、2人の絆は強かつた。2人の強い想いに教えられた。嫁にも教えられた。今更かもしないが、その者に素直に気持ちを伝えようと思つたのだ」

私はカシェス様の言葉を思い出し

「まさか、そのお方は…」

ムドラー様は言葉に被せる様に

「アムエルなら、分かつてゐるだらう、その者から結婚に対する事も聞いてゐるだらう……」

カシエス様の想いを考えたら、余計に涙が出てきた。

シンセ様は遠くで聞いていた。

ムドラー様は

「アムエル？ もし、その者と同じ人生なら、どう思うか？」

シンセ様は私を見ていたので、シンセ様を見つめながら  
「私がその方でしたら、シンセ様を憎む事はないでしょう……シンセ  
様が家庭を築いて幸せであれば……私は十分、幸せです。自分の想い  
は消されないのでですから。自分で自分の力を憎む時もあるでしょう。  
それにお子が何処に居るのかわからないのも……長い間、考へて  
でしょう」

シンセ様は私を抱きしめてきた

「例えでも、聞きたくない。私が父上なら家を出るでしょう……自分  
の地位も何も要らないのです」

ムドラー様は

「男として失格か？」

私は涙を拭きながら

「その方の想いを消させなかつた……何も間違えではありません。今  
がなければ、私はシンセ様に出逢えて居なかつたのですから……感謝  
しています。ムドラー様はこれからも、その方と職務上の付き合いを  
して差し上げたら、その方は幸せだと思います。そのお子の性別も  
歳も分からぬのですか？」

無言で頷いていた。

ムドラー様を見ると窓から外を悲しい眼差しで眺めていた。

私はムドラー様に、（幸運あれ）と唱え

悲しい眼差しは笑顔に変わっていた。

「そのお子の者だろう。何かの職務に当たつてゐるか……幸せな家庭

に居るか…

「ムドーラ様は、お優しい方ですね。シンセ様もそつくり…」

話は終わり、書斎を出た。

時間（ヒガ）を超えて、届けたい気持ち（前書き）

シンセとアムールの愛と絆を見て  
ムーディーは昔のフィアンセだった相手に手紙を出す。  
ムーディー自身が当時の自分の愚かさを痛感していた。

時間（とき）を超えて、届けたい気持ち

私はシンセ様に

「ちょっと、外を散歩してきても良いですか？」

シンセ様が腕を掴んで

「もう暗い、一緒に行く」

私は笑顔で頷いた。

外に出て、シンセ様が心配そうに

「父上の話しが辛かつたのか？」

私は笑顔で

「いえ、幸せになりました」

シンセ様は

「こんな夜に、何処に行くのか？」

私は下を向きながら

「カシエス様の所に行くのです」

シンセ様は驚きながら

「明日では駄目なのか？」

シンセ様を笑顔で見て

「明日では遅いのです…」

夜の道は暗い（先を照らせよ）と囁え

明かりを点けて歩く。

シンセ様は不安なままだ。

「夜はアムエルにとつて危ないのに… そんなに危険になつても行きたいのか？」

頷きながら歩く

「明日はミルエルの結婚式です。その前にお知らせしたい事があるのです」

カシェス様の家の前に着き、扉をノックする。

「アムエル！ 危ない身で夜に出歩くな！」

私は頭を下げ

「それは分かつています。しかし、カシェス様にお伝えしたい事が  
あります…」

カシェス様は驚いて

「急用か？！」

私は顔を横に振り

「いえ、明日はミルエルの結婚式です。師匠が来てくれば、弟子  
も嬉しいのです」

カシェス様は呆れながら

「私は結婚式など、興味がない」

私はおもむろに、ムドラー様から渡された手紙を差し出した。

「カシェス様…ここで、この手紙を読んで頂けますか？」

カシェス様はその手紙を受け取り

「誰からの手紙だ？」

私は笑顔で

「読めば分かります」

シンセ様は首を傾げていた。

私達はカシェス様の部屋に入り

カシェス様が手紙を読み出す。

「カシェス、もう遅いかもしだねが…この気持ちを伝えたい。カシ  
エスに嫌われてしまうかもしれない。昔の私は鈍感だつた。純粹に  
カシェスの事を愛していた。心の底からだ。カシェスに言つた言  
葉に偽りはない。一緒に過ごした日々も忘れていない…カシェスが  
出て行き、カシェスと父上の言葉を聞き…従つのが当たり前だと思  
つていた。しかし、しばらくはカシェスの通うあの場所に私は通つ

ていたのだ。涙を流すカシェスを何度も連れて、家を出ようか考えた。しかし、その頃には私にファイアンセが居た。ファイアンセには悪いがカシェスの事を忘れられずに結婚をした。カシェスが私のお子を宿していたと知っていたなら、私は父上に背かい連れ出していただろう。カシェスの師匠に「愛しているなら忘れろと…」あの時に私がカシェスを離していなければお子と幸せに暮らさせていたかもしだい…

カシェスには謝罪を言いたい。職務上で逢っていた時も、しばらくは目を見て話せなかつた。それは、カシェスも分かつていただろう。今回、シンセとアムエルの2人の絆の強さに気付かされた。私は愚かだったのだ。憎むなら憎んでも良い。お子の話を師匠から聞いた時も自分の愚かさを痛感した。今更、こんな形でカシェスに気持ちを伝えた所で許される事ではないと思うが…私とカシェス、ルキアとアミエルと過ごした時間は忘れない。今後、職務上逢う事も多いと思うが…私を見て辛い思いになるのなら申し訳ない。何度も言つが、心底愛していたのだ。

ムドラー

カシェス様は涙を流し、その手紙は消えた。

寂かれる心は、誰でせぬこのやう（前編）

カショスの凍つた心が、ムードの手紙により時間<sup>じかん</sup>を越えて溶けた。

「愛することは、罪ではないのです

私はカシェス様を見て

「カシェス様がいつもの場所で涙を流していた事も、最後の言葉も忘れておりませんでした。私はカシェス様の気持ちが分かります。何時も、忘れておりませんよね？私だったら… 本当は寂しい半分、幸せなはずです…。結婚式も本当は嬉しいし、幸せなのですね？ただ、思い出が過るのですよね… カシェス様、愛す事は罪ではないのです。幸せに生きて下さい。私はカシェス様の後を継いでも良いと思つております。なので、師匠には幸せに暮らして欲しいのです」

カシェス様は溜め息をついて

「アムエルの辛さを、私と重ねてしまつたのだ… あの時、師匠があの方に何を話したのか分からぬが… アムエルに同じ様になつて欲しくなかつた。だが、それが運命だと思った。シンセ様には、アムエルを愛しているならば、忘れてやれと言つた。気持ちだけは消せないでくれと頼んだ。しかし、一人は離れる事はなかつた… シンセ様の気持ちが強かつたのか… 昔と今と変わつてゐるのか…」

シンセ様がおもむろに

「お子は… 分からないのですか？」

カシェス様は

「お子は女の子だった。師匠が育ての親に預けたのだ。本当は私が育てたかった… 何処に居るのかも分からぬ… もう一度逢いたい。名前だけでも」

私は考え

「カシェス様… もし、私が一人でお子を産んだとしたら… 私のお子も同じ運命でしたか？」

カシェス様は私を見て

「自分の力で自分のお子が危険にさらされても良いと思つたか？」

私はシンセ様を見て

「危険に合わぬように守ります」

カシエス様は

「私も同じ事を言えば、師匠はお子を連れて行かなかつたのか…？  
私は一人で生きなればならないと思ったのだ…」

涙を流すなんて…本当はお優しい方だつたのだ。

「カシエス様…私は親が居ません。育ての親も学園に入つた時には  
もう居ませんでした。ご存知の通り、シンセ様と結婚します。私の  
母変わりになつて頂けませんか？私の結婚式に母として出席して頂  
きたいのです。私は産んで下さつた母上がわからないのです…」

カシエス様は微笑んだ。

「私とアムエルは似てゐるな。こんなに気持ちが落ちつく日が来る  
と思わなかつた」

私はおもむろに聞いてみた

「明日のエルミルの結婚式に出席して頂けないでしょ？カシエ  
ス様がいらっしゃるだけでも、エルミルは幸せなのです。私もエル  
ミルもカシエス様を必要としています。明日まで考えてみてください  
い」

私は頭を下げ、家に戻る。

シンセ様は私の手を握り

「今日、行かなければいけなかつた理由が分かつた。アミエルは幸  
運の天使だな」

私は笑顔になり

「幸せになつて欲しかつたのです…私達のようになつて」

愛する人に降りかかる試練…（前書き）

シンセの心に魔の手が忍び寄る…

## 愛する人に降りかかる試練

家に帰り部屋に戻つても、シンセ様は無言だった。

シャワーにお互い交代で入つても…

何か考え事でもしているのだろうか…

それともムドラ様の話を気にしているのかしら…

ベッドに入つても…

シンセ様は無言のまま…

私はこんな静かなシンセ様を見た事はない…

私は怖かつた…

シンセ様に抱きつこう

「シンセ様…？」

天井を見たまま…。

「何を考えていらっしゃるのですか…？」

シンセ様は

「結婚…」

私は続けて話しかけた。

「結婚？」

シンセ様は喋りだした。

「愛しているなんて言葉は…ただの飾りだ」

私は驚いて起き上がつた。

「何を言つてらっしゃるのですか？」

シンセ様は

「お前の力が欲しいだけなのだ…」

私は何を言つたら良いのか分からず…

「シンセ様？ シンセ様？」

シンセ様は涙を流している

「涙が流れている…どうしたのですか？」

シンセ様は涙を流しながら

「アムエルなんか愛していない」

目も合わせてくれない…

「シンセ様？シンセ様？」

おかしい…

「シンセ様は私を愛してらっしゃるのですよね？」

シンセ様の涙は止まらなかつた。

「誰かに操られて居るのですか…？心を奪われてはいけません！」

私はシンセ様を抱いて、カシャス様の所にテレポートした。

突然、私達が現れてカシェス様は驚いていた。

私は涙を流しながら

「カシェス様…助けて下さい。シンセ様が誰かに操られております」

カシェス様はシンセ様の目を見て

「これは…待ちなさい。アムエル？戦う準備は出来ているか？」

私はシンセ様を助けたい一心で

「はい。戦えます」

カシェス様は何かを唱え、目の前に扉が現れた。

「シンセ様は心の中で戦つてある。シンセ様を助けるのだ。そして  
戻りなさい」

扉の中は暗闇…

カシェス様は

「明かりを点けてはならぬ、ばれてしまう。飛んで進みなさい」

私はカシェス様を見つめ、頭を下げ扉の中に飛び込んだ。

シンセ様…今、貴方の元に行きます。

シンセ様の声が色々な方向から聞こえてくる…

私は先にどんどん進んでいく。

シンセ様の後ろ姿が見えた。  
鏡の自分と話をしている。

手前のシンセ様は

「本当は愛していない！無理に愛していると言つのはおかしいでは  
ないか？アムエルにも失礼じゃないか」

奥のシンセ様は

「心から愛している！私が愛している人と結婚すれば、父上と母上  
が喜ぶじゃないか…無理な事なんかしていいない」

手前のシンセ様は

「父上と母上が喜ぶから、結婚するのか？それは無理をしていいだ  
けじやないか」

奥のシンセ様は

「アムエルを支えれば、私のお子を産んでくれる。跡継ぎも出来る  
ではないか…」

どちらが本当のシンセ様…？

どちらのシンセ様が、私を愛しているの…？

もう一人のシンセ様が現れ

「アムエルが来た。皆で本音を語りうじやなか  
皆が「アムエル…」と近づいてくる。

「本当のシンセ様…」

どの人…？

私は心に問いかけた。

この状況で優しいシンセ様なら涙を流していらっしゃるはず…  
でも、この三人の中には居ない…

アムエルと色々な所から名前を呼ぶ声が頭の中をよぎる。

「私を愛しているシンセ様は…」

「その三人は問いかけてくる…

「アムエルの愛しているシンセはどいつだ？」

三人を見ると笑つて見える…

「私の愛しているシンセ様はここにはいないわ！」

シンセ様達に対して（燃えよ）と唱えた。

三人のシンセ様は消えた…

どこからか声が聞こえてくる…

その時、羽を掴まれ後ろに引っ張られた。

それは、カシエス様だった。

「シンセ様が目覚められたぞ」

私はカシエス様に

「シンセ様を燃やしてしまいました…」

驚きで座り込んでしまった。

シンセ様は涙を流していた。

放心状態に見える…

私はシンセ様を抱きしめて、部屋にテレポートした。

ベッドの上で涙を流しているシンセ様を抱きしめるしかなかつた。

シンセ様はそのまま寝てしまった。

私はシンセ様を横にし、私も眠りについた。

## 変わってしまったシンセ様

朝になり、シンセ様の母上に起こされた。

「アムエル？ もう起きないと。ミルエルの結婚式よ？」

慌てて起き

「お早う御座います。シンセ様は！？」

シンセ様の母上は笑顔で

「もう先に行つたわよ。直ぐに着替えなさい」

私は慌てて着替え、結婚式場に向かった。

…何故、シンセ様は先に行つてしまつたのだろう。会場に入り、シンセ様は前の方にいた。ふと目が合つた。

しかしシンセ様は…目を背けた。

後ろから肩を叩かれ、振り返ると

「アムエル？」

それは、カシエス様だった。

「一緒に並びましょう」と笑顔だった。

ミルエルは素敵な花嫁衣装だった。

誓いをし、ダグ様と幸せそうな顔をしている…

私はシンセ様と祝いたかった…

本当のシンセ様を燃やしてしまつたのか…？

このままじゃ…シンセ様が疲れて果ててしまつのではないか…

私は式の最中にカシエス様の耳元で

「私は修行をしてきます。カシエス様は居て下さい」

カシエス様は驚いていた。

私は式場を出て、カシエス様の家に行く。

「読んでない本を全て身につけて、すぐに戦いに行かない。私を襲う者を倒しに行かなければ…シンセ様の身がもたないわ」

カシエス様が帰つてきて

「そんなに慌てて、どうかしたのか？」

私は本を読みながら

「あの後から、シンセ様がおかしいのです。私は本当のシンセ様を燃やしてしまったかもしません」

カシエス様は

「本物を燃やしていたら、目を覚ましていいない」

私は真剣にカシエス様を見つめ

「一言も話してくれないので。目を合わせても背くのです。私は、今すぐ戦いに行きます。行かなければならぬのです」

カシエス様は

「私がシンセ様に逢つてみる……アムエルは続けていなさい」

私は涙が止まらない。

「必ずお守りしますから……シンセ様どうか待つていてください」

今度は私が愛する資格を取らねば（前編）

愛する者を守るために

## 今度は私が愛する資格を与えます

カシェス様が戻られた。

「アムエル？ シンセ様に聖なる魔法で心の声を聞いた。心中に居たシンセは全て自分の人格だつたと。アムエルに隠していた気持ちがばれてしまつて、アムエルを愛する資格が無いと…」

私は涙を流しながら

「そんなはずは無いです。操られているのです…」

その時、カシェス様の水晶から声が聞こえてきた。

「だから、言つたはずだ。お前の主人は魔界にあると… まあ来るのだ」

私は水晶に指をさし、カシェス様に言つ

「やはり、この主が… 魔界に行く方法を教えてください。シンセ様を助けてます」

カシェス様は私の肩を掴んで静かに話す。

「自分が墮天使になつたとしても、後悔はないか？ 一度とこに戻れないのだぞ？」

私は真剣な眼差しでカシェス様を見て

「必ず戻ります」

熱意が伝わったのか… カシェス様は私を玄関の前まで連れていき

「ならば、別れを告げて来なさい」

シンセ様の元に行くと、部屋にいた。ベッドに座つて肩を落としている。

「シンセ様…？」

するとシンセ様は、私を見て涙を流していた。

「愛しているか？」

私はシンセ様を抱きしめ

「私はシンセ様を愛しています。何があつた… シンセ様がどんな

人にならうとも…何時までも愛しております」

シンセ様は

「しかし、私は愛する資格を失った」

シンセ様は疲れきっている…

「資格なんて要りません。資格が必要ならば、私が愛する事を許します。今度は私が愛を注ぐ番です。これから、魔界に行きます。戻れるか分かりません。これ以上、シンセ様を苦しめたくないので。戻つて来なくても…私がシンセ様の側に居た存在だけは記憶に残しておいてくれますか？」

シンセ様は驚いて、私を強く抱きしめた。

「行つてはならぬ。行くならば、私も着いていく。このまま、逢えなければ…どう暮らしたら良いのだ？」

私はシンセ様の顔を見て、笑顔で答えた。

「幸せに暮らしてください。魔界には、シンセ様はお連れ出来ません。私にとつてとても大事なお方なのですから」

笑顔で見つめても、シンセ様は悲しい顔をしたままだ…

「お子にも逢えなくなつたら、私は生きて行けぬ…」

シンセ様の体を剥がそうとするが、シンセ様は離れてくれない。

「では…帰つてくるのを待つていて下さいますか？」

「私の心を知つても、受け入れてくれる…必ず一番に私の元に戻つて来なさい」

シンセ様は見送ると言い続けるので、一緒にカシェス様の元に行く。ムドラ様と母上に

「これから、一人で魔界に行きます。シンセ様をどうか…」

ムドラ様は

「必ず、戻りなさい」

私は頭を下げた。

シンセ様は

「見送つてきます」と言い、一緒に家を出た。

ミルエルとダグ様に逢いに行き

「結婚おめでとうございます。幸せに暮らして下さい」

シンセ様は私を抱きしめ、離れようとしない…

ダグ様がシンセ様の異変に気付いたのか

「何があつたのか？」

シンセ様が

「これから、アムエルは一人で魔界に行く。もう逢えぬかも知れない…私の心を全て知つたのに受け入れてくれた」

ダグ様はシンセ様を、私から離し

「必ず戻つてきなさい。シンセは必ず待つている」

笑顔で「必ず…戻ります」

私はシンセ様に

「戻つたら結婚式ですよ」

シンセ様は涙を流し続ける

私は後ずさりしながら…

「ただ、必ず戻れるかはわかりません。全力で戦つてきます。ダグ様、シンセ様をどうか…ミルエルの事も宜しくお願ひします」  
シンセ様の顔を見たら、最後かもしれないと思いキスをした。

「私は何処に居ても、シンセ様を愛しています」

ミルエルは何も口を開かなかつた。

「ミルエル…これが運命なのです」

頭を下げ、その場から去つた。

カシエス様の家に急いだ。

家の前でカシエス様が待つっていた。

「準備は良いか？」

カシエス様にお辞儀をして

「…はい」

カシエス様は笑顔で

「娘よ。必ず戻つて…後を継いでくれ」

カシェス様の笑顔を見られて良かつた。私も笑顔で答えた。

「シンセ様と全ての生命の為に戦つてきます」

カシェス様は聖なる魔法を唱え

「ここから歩いて行けば、たどり着けるだろ？」

入ろうとしたら

「アムエル！」と、シンセ様が抱きついてきた。

後ろには、ダグ様とミルエルがいた。

「シンセ様？ 直ぐには戻れませんが…」

シンセ様は何も言わなかつた。

「行つて来ます」と言い扉の中に入つた。

## 初めての魔界

そこは雲のかかつた、蛇の目の道が続いている。

「ここが魔界ね…魔界の一日は天空の三日。時の流れが違うのが凄いわ。私は神様に忠誠を誓つた。必ず帰らなければならぬ薄暗い道を歩く。

色々な所から不思議な声や音が聞こえる。

黒い不思議な鳥が飛んでいる。

私は疲れながらも、歩く事をやめなかつた。

すると向から馬車が来た。

「そなたが来るのを待つていた。馬車に乗りなさい。歩くと時間が掛かる」

私は言われたままに馬車に乗り心の中で

「シンセ様…愛しております」

ゆっくり馬車は進み…

何日経つた事だろう…

天空とは全く違う…殺氣ばかりの空間。

大きなお城の前に着いた。

馬車は止まり、私は馬車を降りた。

薄い雲の中から誰かが歩いてくる。

長髪の背の高い…殺氣も感じない、まるで天使の様な人…

「アムエルよ、良く来た。そなたが来るのを待ちわびていたよく顔が見えない…」

「あなたが、夢の主ですか?」

「あなたが、夢の主ですか?」

私は驚き振り向こうとしたが、その人に後ろから抱きつかれた。

「手荒な真似をしてすまなかつた。アムエルをこちらに呼ぶためには仕方なかつたのだ…」

私はおもむろに

「お名前を、教えて頂けますか？」

その方は、私の耳元で

「……ラシスだ」

私は驚き、瞬時に離れた。

「ルシフェル様達を殺めた方だったのですね…」

ラシスは私を見て

「知つていたのか？とりあえず、私の部屋に来なさい。疲れただろう…」

ラシスが話だし

「アムエルは私の嫁になるのだ。それは覆せない事…時間はある、ゆつくり考えなさい」

ラシス様は部屋を出ていった。

私は部屋から出ようとしながらも出ることは出来なかつた。  
聖なる魔法にある魔法も効かない。

私をここに来させる為だけに、シンセ様は操られたのね…

窓も壊せない…

テレポートも使えない…

椅子に座り…

「どうすれば、この部屋から出られるの……？」  
必死に考えていた。

私の前にラシスが現れた。

「アムエル……嫁になる決心はついたか？」

私は聞く

「ラシス……あなたは何を考えているのですか？あなたは私の力を欲しいだけです」

ラシスは部屋の中を歩きながら笑っていた。

「それだけだと思うが？」

真相を知りたかった。

「天空を滅ぼそうとしていますね？」

ラシスは私の前に立ち止まり

「天空に神か……何故私が魔界にいるのかを知りたいのか？」

私はラシスの目を見つめた。

ラシスは急に私の頬に手を当て

「そんな事は後々で良い。私はアムエルの体も気持ちも欲しいのだ。妻として……そなたが産まれた時から待っていたのだ」

見つめたまま

「ならば、私の母を知っていますね？」

ラシスは笑う……

「アムエルの母か？それは面白い質問だ。言えぬな」

私は何も言えなかつた。

「そなたの力では、私を殺める事は出来ないだろう。それなのに、ここに来た。素直に嫁になる事を認めなさい。なるべく、惚れ薬を飲ませてまで嫁にはしたくない。大人しく私を愛せば、天空のフィアンセには手を出さない。約束する」

私は部屋のドアが開いているのが見え、急いで出た。

部屋を出て城の中を歩き回る。

魔界人が次々に現れてくる。

ラシスが追いかけてくる…

私はラシスに

「私が天空にいる限り、ファインセに手を出すのですか？」

ラシスは笑いながら

「そうだ。と言つたらどうする？」

負けたくない…

「私は墮天使にならうとも、あなたの嫁にはなりません」

ラシスは私の頬を触り

「やはり、母の様に強い娘だ。ならばここに居る間に、私の背中を狙いなさい。アムエルには、出来ないだろ？ 私を殺めたとしても、本当に墮天使になつてしまふぞ？」

私は強い目で笑つて

「狙つても良いのですね？」

ラシスは笑つていた。

「本気で墮天使になつても良いようだな。なるべく、その姿で愛したいのだがな… 今は戻つて貰おうか？」

ラシスが手を離すと

私は时空の狭間に飛ばされた。  
暗闇の中で立ち止まつていた。

そこからは、人間界・魔界・天空が眺められる。

私の周りには、魔界人が多数現れた。  
魔女が出てきて

「ラシス様は、お前が墮天使になつても構わないと、おっしゃつて  
いますわ… その姿でラシス様の嫁になれば宜しいのに… 私達の手で、  
そろそろラシス様の嫁になる事を誓つのだ」

私は笑いながら

「その言葉を鵜呑みにすると思つのですか？」  
自分の周りに竜巻を起こす。

魔女は笑っていた。

「私は最後まで戦います…」

その時、何処からか光が現れ  
魔界人と魔女は吹き飛ばされた。

私は光に包まれ、瞬時に神殿に戻された。

「まだ、戦いに出る時ではない。シンセの元に戻り、カシェスの元  
で修行をしなさい」

私は神に

「私が一人で魔界に行つた事は、裁かれないのでしょうか…」

神は

「お主の行動は正しい。ラシスとの接触で少し話がわかつた。役に  
立つておる」

私はお辞儀をして、神殿を出る。

操っていたのは、ラシスでした。

神殿を出ると、カシエス様とシンセ様が待っていた。

シンセ様と目が合い、優しい眼差しで迎えてくれた。

「何故、ここにいると分かったのですか？」

カシエス様は

「狭間で竜巻を起こしただろう？ 天空にも少し竜巻が入つて来ていたのだ…アムエルかと思ってね」

シンセ様は私の前に近づき

「私は、自分自身に紛らわされていた。何を言つたのか分からぬ。

傷つけたか？」

私は笑い

「いえ、私を大事にしていてくれました」

カシエス様に

「神が、まだ戦いに出る時ではない…魔界でシンセ様を操つていた者はラシスでした」

カシエス様は考えていた。

シンセ様に

「私が魔界に行つてから、どれ位経ちましたか？」

シンセ様は

「一ヶ月だ。正気に戻つてから…心配で一日が長かったよ

カシエス様に

「修行を続けなければならないです」

カシエス様は頷き

「今日は家に戻りなさい。休むのです」

私は笑顔で返事をした。

カシエス様は

「疲れているだろうから、シンセ様の部屋まで送る」

テレポートと唱え部屋に着いた。

部屋に着くと

「戻つてこられたのね…」と窓の外を眺める。

シンセ様は

「アムエルに何て言つたら良いのか分からない…」

私は首を傾げ

「普通に接してくれたら良いのですよ…それとも、私とは居られないになりましたか…？」

シンセ様は私を見て

「私の心の中で何を聞いた?」

私は何も言わずベッドに入りるとシンセ様も横にきた。

「言つ必要は無いと思います…」

シンセ様は

「いや、聞きたいのだ…」

私は考えながら

「心の中で、シンセ様が鏡相手のシンセ様と言ひ合つをしていました。片方のシンセ様は、愛していないのに愛していると言つのはアムエルに失礼だ。それに対しても反対のシンセ様は、心から愛している。父上と母上が喜ぶじゃないか…と。それに対して、片方は父上と母上の為に結婚するのか…と。それで、アムエルがお子を産んでもくれれば…と」

涙が出てきた

「まだ言わないといけないですか?」

シンセ様は首を横に振り

「ダグエルの結婚式の時の記憶もないのだ」

私は続けて話す

「あの日は、シンセ様が先に起きて会場に行つてしまつて、一緒に祝いたかったのですが、目を合わせるとシンセ様は目を背けるのです…それで、愛する資格を失つたと。私は資格など要りませんと言

いました。魔界に行くと言つたら…行くなと涙を流して、ずっとおつしゃつしていました…それ位です

シンセ様は

「これだけは信じてくれるか?」

私は顔を覗き込む

シンセ様は私の手を掴んで

「アムエルの事はずつと愛している。父上と母上の為に結婚をするのではない。アムエルを心底愛しているからだ。お子もアムエルとのお子だから愛しているのだ。何があつても信じてくれるか?」

私はシンセ様を見て

「信じるもなにも、私はシンセ様を愛していますし、シンセ様を信じていますよ?」

シンセ様は笑顔だった。

私も笑顔になる。

シンセ様が私の頭を撫でながら

「アムエルが魔界に行つたと聞いて、もう逢えないと思つた。カシエス様に聞いた。俺の為に危険な事して…」

「私は愛するシンセ様の為に、これ以上苦しめたくなかったのです。魔界から戻つてきたら結婚式の約束も忘れましたね?」と笑う

布団の中で楽しく話をする。

「シンセ様はいつ記憶が戻られたのですか?」

「アムエルが魔界に行つてすぐだよ。扉が閉まる途中で気がついた。中々寝付けなくて…アムエルの顔を思い出して泣いていた。男らしくないだろ?」

私は笑顔で

「泣いているシンセ様も素敵です」と笑った

二人で横になつていると、いつの間にか寝てしまった。

シンセ様とお子と二人で花畠に行き遊んでいる…  
幸せな夢…

目を覚ますと、シンセ様がキスをしてくれた。

「シンセ様？ 深く幸せな夢を見たのです」

シンセ様は笑い

「私も幸せな夢を見た」

「どんな夢ですか？」と聞くと

「アムエルとお子と花畠にいた」

驚いて

「私も同じ夢を見ましたよ！ でも、お子が男の子か女の子か覚えて  
いないのです… 残念です」

シンセ様は

「残念ではないだろう。逢えるのだから」と笑った。

私は笑い

「そうですね。でも、女の子が良いです」

シンセ様は

「男の子が良いのだけどな…」と笑う

「意見がわかれましたね」

シンセ様は考えながら

「お子が一人じゃなくとも構わないだろ？ 愛を深めれば…」と笑う

私は笑いながら

「シンセ様つて、そんなに積極的でしたか？」

シンセ様は笑いながら

「今まで、アムエルを見守るだけだった。しかし、一緒に居られる  
間は見守るだけじゃなく… 嫉妬心も何もかもアムエルに見せようと、わがままか？」

私は考えながら

「わがままなんかではありません。シンセ様の素直な気持ちです。それを表に出して下さるだけで、私は幸せ者です」

「私は久しぶりに幸せな時間を過ごしていった。

私は時計を見て

「そろそろ、起きないと…カシェス様の元で修行をしなければなりません」

シンセ様は笑顔で手を取り

「後五分、抱きしめさせてくれぬか?」

私は笑ってしまった。

「シンセ様は今まで、自分の気持ちを抑えていたのですね

シンセ様の笑い声が聞こえる。

シンセ様は手を離し

「今日からカシェス様の家まで一緒に行く。帰りも迎えに行くから私は驚き

「シンセ様は」自分の修行を頑張つて下さい?剣術の方が体力使うのですから…」

また私の手を掴み

「ダグエルは送り迎いしているよ?」

私は笑えてしまい

「そうなのですか?なら、お言葉に甘えます」

部屋を出ると

ムドラー様が居た。

「アムエル!帰つて来ていたのか?!」

笑いながら頭を下げ

「昨夜、神殿に戻りました。もう夜更けでしたので、挨拶が遅れました」

ムドラー様は溜め息をついていた。

「魔界で誰に逢つたのだ?」

私は隠さず

「ラシスです…狭間で戦いの前に神殿に戻されました」

ムドラー様は私の肩を叩いて

「そうか…戻つてこられてよかつた」

また頭を下げ

「ご心配おかけしました」

家を出て、カシェス様の家に向かう。

シンセ様と手繋いで歩く。

「シンセ様？ラシスは私の産みの親を知つていい様でした。母親に似て気が強いと…」

シンセ様は笑顔で

「アムエルの産みの母親に逢いたいな」

首を傾げ

「カシェス様が居ますよ？」と笑う。

シンセ様も首を傾げ

「カシェス様にはアムエルを頼まれたよ？」と笑う。

遠くからミルエルが手を振つている

「アムエル！」と走つてくる

私は親友に逢えて涙がでてきて、抱きついた。

「ミルエル…心配かけたね」

ミルエルは

「そんな事言わないで、逢えただけで嬉しいよ。今日はは旦那様も一緒？」

私は笑顔で

「今日から送り迎いしてくれるつて！」

ミルエルは笑顔で

「ダグ様と同じだね」

ミルエルはダグ様の所に戻り

私はシンセ様に

「仲間に逢えて嬉しいです」

シンセ様は私の手を掴んで

「さ、行こう」と向かった。

カシエス様の家の前で

「有難うございました。シンセ様も修行頑張つてくださいね」

シンセ様はおもむろに

「愛しているか?」

私は首を傾げ

「愛していますよ?急にどうしたのですか?」

シンセ様は笑いながら

「離れたくないのだ……」

私は笑つて

「シンセ様……とても嬉しいです。お互い修行を頑張りましょう?また夜にお話ししましょう」

シンセ様はゆっくり戻つて行こうとした

私は

「シンセ様?」

シンセ様は少し遠くから振り返つた

「どうした?」

私は伝えるべきか悩みながら

「魔界で、ラシスが私に行つたのです……」

シンセ様が戻つてきた

「言いくらい事か?」

私は頷きながら

「ラシスは私を嫁にしたいと……墮天使の姿でも……惚れ薬を使つても

良いと……」

シンセ様は首を傾げて

「でも、使わなかつたのは何故だ?」

不安になり、シンセ様の手を握つて

「出来れば使わず嫁にしたいと…でも、私がラシスに隙を『』えてしまつたら薬を使われるのではないかと不安でならないのです…そうなれば、私はシンセ様を忘れてしまうかもしません…刃を向けるかもしません…」

シンセ様は

「今は考えなくて良い。そうなつたとしても助ける。安心しなさい」と頭を撫でられ、戻つていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6876y/>

---

天空の恋愛～晴れ時々曇～

2011年11月23日20時45分発行